



心の糧

十二使徒評議員

エズラ タフト ベンソン

今月の表紙

パウロの時宜を得た勧告がある。「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」(エペソ 6:11-12)

毎日私の机上を行きかう手紙や印刷物には我が国をはじめ他の国々の人々、特に両親の苦慮と心配、我々の愛する全てのものを、すぐにも失ってしまうのではないかとの恐れという言葉が見られる。

今日、我々は広く行きわたっている、こうかつな荒廃の悪にさらされている。こうした極悪で破壊的な悪は今や音楽や絵画にあらわれ、性的な墮落やいわゆる性教育の中にはびこっている。これらの悪は幻覚剤の奨励、若人向けの興味本位の雑誌や秘密出版物、テレビ、映画、ラジオ番組の中に顕著に見られるのである。

我々は、我々をおびやかす不敬な無神論の力を打ち破ることができる。しかり、全能なる神の助けによってできるのである。ほとんど我々を支配するかのように見える悪の力と戦って、我々は勝利をおさめなければならない。靈感された諸々の予言者を通して神があらわされた永遠の真理は変わることがなく、またこれからも変わることがないのである。「悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固め」ようではないか。安全への道は他に存在していない。

神は死にたもうてはいない、神は生きたもうのである。なぜなら神は愛する御子イエス・キリストと共に近代にあらわれたもうたからである。

— も く じ —

モロナイ.....	リチャード J. マーシャル...	145
私は勇気を見ました.....	ジーン・ハート...	147
信仰簡条の共著者.....	ジョン W. ウェルチ...	150
高 慢.....	ポール R. チースマン...	154
自分を変える経験.....	リード H. ブラッドフォード...	156
若 者.....	マリオン D. ハンクス エレーン・キャノン	159
最もすばらしい特権.....	マリリン・マクミーン・ミラー...	160
清いという言葉.....	リチャード L. エバンズ...	161
質問の技術.....	スタンレー M. グラボウスキー...	162
神権の恵みと力.....	マーク E. ピーターセン...	164
私のとおりにしなさい.....	モンロー および シャーリー・パックスマン...	167
ローカルニュース.....		169
平凡のなかの一編の詩.....	リチャード L. エバンズ...	裏表紙

子 供 の ペ ー ジ

ちいさすぎてもおおきすぎても.....	サラ L. ジョンソン.....	18
若い羊飼.....	ヘレン ベイ ギボンズ.....	20

紀元 421 年にモロナイの版が地中に埋められた時の周囲の状況について、モルモン経にはほとんど記されていないため、読者は想像を阻まれていた。

詩人、劇作家、学者、数限りない著述家に加えて、今一人の画家が描写を試みた。わずかな言葉を手がかりに、このモロナイの絵は見事に描かれている。この作者はアメリカの有名な画家トム・ラベルで、教会の承認のもとに描き、間もなく全世界の教会訪問者センターに掲げられるであろう。またおそらく、末日聖徒は将来にわたり、この絵を使つて、クモラの丘でニーファイの版を埋めたモロナイの使命を論じ合うに違いない。

ラベル氏はこれにより、モルモン経で最も有名な父と子であろうモルモンとモロナイの二人を描いたことになる。1968年4月、エラ誌は、ラベル氏の手によるモルモンの絵を表紙に載せた。注意して見ると、モロナイのつけている腕輪は、モルモンの絵に描かれているものと同じで、作者は二代にわたり予言者、歴史記録者、勇士であった父と子の関係を描いている。

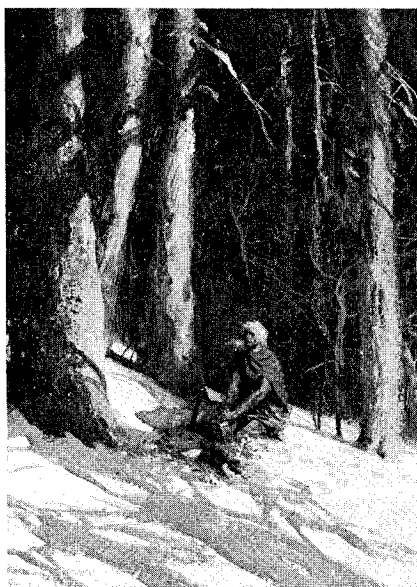


モロナイ

リチャード J. マーシャル

モルモン経を読んだ人なら、モロナイが最後にクモラの丘に金版を埋めた時の周囲の状況がどのようなであったかを知りたいと思うに違いない。その金版は14世紀後ジョセフ・スミスに示されるまで人の前にあらわされなかったのであるが、モロナイは春夏秋冬いずれの季節に金版を封じたのであろうか。

最近この場面が絵になり、モルモン経の読者およびモルモン経を勉強している人はその状況をうかがい知ることができ大いに感謝している。わずかに知られている事実を基にして推測しながら描いたのだが、それはアメリカの有名な画家トム・ラベルの作である。うっそうとした木々を背にして一人寂しく雪の中にかがむモロナイが描かれ



＊画家トム・ラベルの描くこの絵は、斬新な画法をとっている。遠近法の使い方とモロナイの頭の位置に注目していただきたい。絵はかならずしも完成順に並んでいるのではない。

ている。それは將軍モロナイが手を強く握り合わせて聖なる記録の上におき目を閉じ頭を上げて祈りを捧げている図である。恐らく、この神聖な保管用の穴と記録を奉獻しているのであろう。金版が月の光に輝き、レーバンの剣が影になって見られ、掘ったばかりの土が雪の上に散っている。

けれども、これは国中でたった一人生き残り絶望に打ちひしがれた人の姿ではないことに注意していただきたい。あらわな腕は勇士の腕であり、上を向いた顔には予言者の静かな力がみなぎっている。この人こそが、この言葉を記したのだった。「私は一人のこって友もなく行く所もない。また主が私をいつまで生き永らえさせたもうかもわからない」（モルモン8：5）

なぜ白髪まじりの髪をし、ぼろぼろに破れた服を着ているのであろうか。たしかに、この人は若くなかった。モルモン経の研究家は紀元385年から400年にわたって繰り返された戦いの後、クモラの大戦争で生き残ったモロナイ



はおそらく若かったであろうと指摘している。それはモロナイがクモラの戦いが始まる前に最後の準備をして記述を終えてから約36年後のことであった。モロナイの父が紀元384年に74歳であったのは明らかで、その時、「年を老い始めた」とモロナイは述べている。モロナイがクモラに一万の軍勢を率いた時、おそらく20歳前半か年をとっていたとしても30代、40代であったと思われる。最後の戦いの後、モロナイには行くべき家もなく、安らぎを得る地もなく、追り来るレーマン人の殺戮の手を逃れていた。彼の衣服に、ニーファイ人の文化と優美さをとどめるものはもはや何もなかった。ただ動物の皮をまとっているだけである。しかし、モロナイは父モルモンの手に見られたと同じ腕輪を身につけている。

（1968年10月号聖徒の道P. 38）

ただモロナイの学識を表わすものは金版である。事実モロナイは教養のあった人で、それが次の聖句にも見られる。「さて私たちは、私たちのいわゆる変体エジプト文字を学んだ知識でこの記録を作った。この文字は代々私た



ちの間に伝わってきて、私たちの言語が変るにつれて変ったから変体エジプト文字と言うのである。もし私たちの版が十分に大きかったなら、ヘブライ語で書いたであろうが、ヘブライ語も私たちのために変っている。しかし、ヘブライ語でこの記録が書けたならば私たちの記録には不完全な所がなかったであろう。」(モルモン9:32~33)

ある読者は、「私はこれでこの民についての話を終りにする。私はモルモンの息子であって私の父はニーファイの子孫である」(モルモン8:13)の言葉でモロナイは紀元400年に記述を終えたと考えている。モロナイの考えていたように歴史を書き終えていたとしたなら、後にだれかが書き加え、翻訳し、つづめるために金版をどこかへかくしおいたであろう。さもなくば、さ迷い歩く間、手に持っていたであろう。

ブリガム・ヤング大管長は1877年4月25日マントイ神殿用地に立ち、ウォーレン S. スノーに次のように述べている。「ここは予言者モロナイが立ち、神殿の敷地として奉献した場所で

ある。だからこの地に決めたのだ。ここ以外に神殿用地はない。」

モロナイは神聖な記録を守るという召しの重要性をかなり長い間考えていたように思われる。

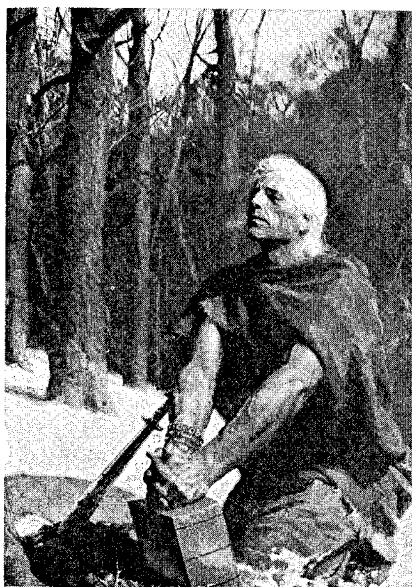
モロナイは、モルモン言8章13節で一度記述を終えたとする説がある。モロナイが「書くことは少い」「この民についての話を終りにする」(モルモン8:1, 13)と記した後もさらに書き続けたことは明らかである。こう述べた後もモルモン経に後につけ加えるであろうことを述べかなりのことをつけ加えた。モルモン言の長い第9章を記し、イテルの書物の翻訳を記し、最後に自身の名をつけた章で終わっている。最後の日付は紀元421年で終わっている。

それゆえ、「私モロナイは決してキリストを否定しない」という証を棄てなかったただ一人の生き残りモロナイがこのキリストの第二の証である記録を雪の中にひざまずいてかくした時は、老人であったと考える方が賢明であろう。

この人が黙示者ヨハネが示現で見た天使となるべき人であった。「彼は地に住む者に……宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて……」(黙示14:6) 末日聖徒は、モロナイが古代にヨハネの述べた天使であり、1831年11月3日オハイオ州ハイラムで予言

者ジョセフ・スミスに主が啓示されて確認された天使であることを認めている。「汝らこの世に住む者よ。これらのこと汝の中に知られんため、永遠の福音を持ち天の唯中を過りて飛ぶわが天の使を遣わせり。この使はすでにある者たちに現われ人間に福音を付したり。」(教義と聖約133:36) モロナイは最後の章で「私の兄弟であるレーマン人」(モロナイ10:1)に別れを告げて、彼らにキリストを証し、4節に、今日末日聖徒の宣教師が求道者にモルモン経の証を得させる時によく使う聖句である大きな訓戒を与えた。

ラベルが新たに描いたこの予言者、勇士、さすらい人は、モルモン経最後の聖句を読むと、孤独やさびしさといった感じは受けない。「さらば、すべての人たちよ。私はじきに行って私の霊と私の体とが再び相合するまで神のパラダイスで安息に就く。私は勝利を得て空を飛んで来て、生きている者と死んでいる者との永遠の裁判官である偉大なエホバの楽しい『法廷であなたたちに逢う。アーメン』」(モロナイ10:34)



私は 勇気を 見ました

ジーン・ハート

胸の熱いような痛みと対照的に、私の心は恐れで冷たく凍りました。寂しく暗く長い夜に、私は寝たまま癌患者の可能性というものを考えようとつとめました。

恐れで眠られない苦しい夜が続きましたが、その間中、私は死とはどういうものかということを考え続けていました。しかし、その思いをいっそうつらいものにしたのは、一年ほど前の別の出来事でした。その時に初めて、私はグレッグの勇気の大きく深かったことをよく知ったのです。

グレッグは17才で、背が高くハンサムなすがすがしい印象を与える少年でした。彼は陸上競技のランナーをしていて、5年前に、家族のみんなと同じように1マイルマラソンに出場したいと言いだしたのですが、私はあまり賛成ではありませんでした。彼は体もそう強い方ではなく、落胆する結果に終ることは目に見えていました。彼はいつも物事を精いっぱいやらねば承知しない人で、どんなことでも、やると決心したら全力でぶつかっていました。私は、その上にまたそんなことまでしなくとも思っていたのです。しかし、彼はどんな時にも、あきらめるところかますます決心を固くする性分でした。

グレッグは、シーズンだけではなく、一年中休まずトレーニングに励みました。ランニングにとって良くないと思われる食物や活動をきっぱりと断ち、夏は祖父の家畜農場で働きました。昼は干し草畑で一生懸命働き、それが終わると自分から言い出して野菜の栽培を手伝い、それから近所の丘でランニングのトレーニングをしました。

みんなは彼のスケジュールを見て心配し、自分に厳しくしすぎてはいけなさと忠告したのですが、彼は聞きませんでした。

彼は完全主義者で、そのスケジュールによってランニングに要求されるスタミナと力がつくと考えていたのです。

夏休みを農場で働いて新学期に登校したグレッグは、元気がなく、いつも疲れている様子でした。子供の時にリューマチ熱にかかってから、私たちは特に心臓に気をくばっていたので、気休めのためにも、ぜひ一度心電図をとってもらって精密検査を受けるようにと、彼を病院に行かせました。その結果は異常が見られませんでした。私たちは疲れたように見えるのは、きっと夏中働きすぎたからだろうと考えました。

クロス・カンントリー・レースが始まると、グレッグはますます厳しいスケジュールを自分に課すようになりました。毎日、学校が終ると家に帰って服を着がえ、台所の炉床のわきに腰かけて一日の出来事を報告しながら、重い登山靴のひもを締めては、山にでかけていきました。足を鍛練するために重い靴で山を走るのです。彼は重い靴で走っていれば、トラック・シューズで走る競技の時にどんなに有利かを、冗談めかして話してくれました。けれども山を走るのにはもっと他の動機もあったのです。自然が好きな彼は、トレーニングしながら、その時間に心の栄養補給もしていたのです。

その年の十月のある午後、グレッグはいつになく疲れて、左足のももがずきずきすると言い出しました。けがをしたのだろうというのですが、彼が筋肉の痛みを訴えるのは珍しいことではなく、ランナーはよくそういうことがあるので、気にもしませんでした。しかしその時はいつもと違って、グレッグはトレーニングを休むというのです。

盛大な学校行事でもあるクロス・カンントリー・レースは、それから数日後にせまっていました。グレッグは痛む足をそ

れ以上悪くしてはいけなと知りながら、どうしても出場したいと言ってきたききませんでした。無理をおして参加したので途中で足がまったく動かなくなり、彼は非常な激痛に見舞われました。私たちが彼を病院に連れていくと、彼の説明を聞いた医師は肉ばなれだろうと言ひ、その痛みは続き、なおるのには時間がかかるし、おそらく回復しても走れなくなるだろうということでした。グレッグは松葉杖を使って歩くことになりました。

グレッグは、彼らしく、絶対走れるように回復してみせると決意していたようでした。

医師は検査に来なさいと言ひました。しかし、学校の階段を降りていてだれかに松葉杖をけられ、下までころげ落ちた時、痛みは激しかったのですが、グレッグは注意して安静にしていれば大丈夫だと考えて、医師の所へは行きませんでした。彼は痛さを表にあらわさないようにしていましたが、日がたつにつれて悪くなっていくように見え、体重も減ってきました。彼の目は苦悩に満ち、やせた体はその痛みが非常につらいものであることを物語っていました。

たまりかねた私たちが医師の所へ行くと、グレッグの肉ばなれが、実は骨肉腫(骨に生じる癌)であったと知らされました。グレッグの左足はもののつけねから切断されました。

グレッグは挫折した生活や夢を再び建てなおさねばなりませんでした。17才の彼に、それからの将来が明るく楽しいと言える人はいたでしょうか。わずか5ヶ月前の8月に生まれて初めてデートをして、パートナーと踊り、車の運転を習い始めたばかりでした。スポーツにもやっと優勝できるようになり、1,500メートル競争では優勝候補にまでなっていました。一生懸命に努力をしてやっと将来の道が開けてきた矢先のことでした。

グレッグの足はできるだけ上まで切断しなくてはならなかったもので、10センチそこそこが残されただけで、義足をつけるのがやっとでした。彼の足は長かったので義足を操作するのはなかなか大変なことでした。

彼が車の運転席にすわる方法を発見する以前のことでしたが、新しい問題が出てきました。自分の足が10センチにも満たないため、直角に座わる時に義足が吸引力を失って足からはなれそうになったのでした。それで彼は背骨をそらして片足の側だけで座りました。その結果痛みで気分がわるくなりました。彼は家を離れると、義足がゆるくなるのではないかと

とたえず心配しました。

医師はできるだけ早く学校へ戻ってみんなと同じ生活をできるようにと勧めましたが、グレッグは上手に歩けるようになるまで学校へ行かないつもりでした。

歩くという簡単な動作がどんなに複雑なものか考えてみた人はいるでしょうか。私たちはいっしょに歩き方を勉強しました。私が部屋の中を歩くと、彼がそれについて自分の足を真似て義足を動かしました。来る日も来る日も、くたくたに疲れてしまうまで、練習に練習を重ねました。

そしてついに、私たちが目標にしていた新学期の始まる日がやってきました。彼はみんなの目が自分に注がれていることを意識していました。心理的なことに加えて、学校には階段や傾斜路という新しい難関が控えています。

グレッグは手を貸そうとするのを断わって、足を切断する前と同じようにひとりで歩きました。だれかの援助がどうしても必要な時でさえ、人に頼むのをいやがりました。このような時の精神的な苦痛がどんなものかは、きっとだれにもわからないでしょう。それに比べたら体の痛みの方がずっと軽いものだと思います。

どこへ行っても仲間に入ることができず、毎日の下校時には陸上チームの練習している様子を見ながら家に帰り、大好きな山を走ることができないことも、彼の心を苦しめました。

ある日、せがまれて彼を以前によく行っていた山へ連れていった時に、私は、彼がどんなに欲求不満を感じていたか、またその気持ちをよくがまんしていたかということを初めて知りました。山は雪が深いのですが、彼はどうしても義足をはずし、松葉杖と片足で丘を登りたいと言ひました。そんな彼を見て、私は羽をもぎとられてさへ飛ぼうとした高貴な鳥のことを思い出しました。そして彼のあとから、歓声をあげて丘を登りたい気持でした。しかし、車の所へ戻ってきたグレッグは、静かに足の雪を払いながら「母さん、帰ろうか」と言うだけでした。家に着くと、彼はシャベルで車道とわきの道の雪かきをしてくれました。

グレッグはそれまでの人生の障害物にすべて打ち勝って、適応してきました。それはみんなが驚くほどでした。しかし彼はそれでも満足せずに、友だちに負けずに泳いだり、レスリングをしたりし始めました。

死ぬ時間はあっても、生きられる 時間はそうないかもしれないんだ

足を切断した時に、私たちは彼が特に重い癌で、十中八、九は肺をも犯していて助からないということを聞かされていましたが、そのような時にはだれでも、自分だけは例外だと思えるものです。

しかし、グレッグは例外でありませんでした。3ヶ月してレントゲン検査を受けた時、医師は両肺に癌が転移しているのを認めました。グレッグは最初から自分の命が危ういことを知っていました。その時は手術も不可能で、どんな手当を尽してもしょうがなかったので、彼は自分の病気がなおる見込みのないことを悟りました。

私はその時までグレッグを勇気づけていましたが、もはや慰めの言葉ありませんでした。ふたりとも望みがないと承知しているのに、希望があると言うことは、正直な彼を侮辱することでした。私はどうしようもなくむなしい気持ちでした。

グレッグは病院から帰る途中、ほとんど話をしませんでした。私たちが家に着くと、グレッグの親友が弟のタコあげを手伝っていました。親友の弟は遊び疲れて、タコを放り出していました。グレッグはタコあげを見たいと言って、タコを取りあげ、糸をほどいて、あげ始めました。まもなく糸が足りなくなって新しい糸をつけましたが、タコは三月の風に勢いよくあがり続けました。ずんずん高くあがって、また糸が足りなくなりました。私たちはみんな息をのんで、目がくらむような高さでもう小さな点になっているタコをみつめました。

グレッグは私をふりむいて、「母さん、高さの新記録だよ」と言いました。私は彼がタコのことばかりを言ったのではないことを知っていました。

その週末は家中が重苦しい雰囲気でした。日曜日の夜、家族が各自の部屋にひきこもってグレッグと夫と私だけになった時、楽しくおしゃべりしようとつとめたのですが、最後は三人とも黙りこくってしまいました。悲しみと落胆の沈黙の中でグレッグが言いました。「こんなふうではやっていけな

いや。生活の計画をたてなくちゃ。死ぬ時間はあっても、生きられる時間はそうないかもしれないんだ」。

グレッグはそう言って「生活プラン」をたてました。彼は筋肉強化の訓練を始めましたが、ごくわずかずつでも、片足と両腕の訓練は最後までやめませんでした。

そのようなグレッグを見て、私は一時的に気が休まり、胸の痛みも心なしかわらぎました。そんな間に、私はグレッグのいだいている真の勇気を知ったのです。それは恐怖に刺激されるイチかバチかという戦場での勇気ではなく、おだやかで計画的な飾らない勇気でした。

そうです、私は「勇気」というものを知りました。私はグレッグの中にそれを見出しました。有望なランナーだったのに、足を切断しなくてはならないと告げた時にもおだやかな表情を失わなかった彼、片足で腰まで雪にうまりながら断固として山を登った彼、また、肺臓癌で数ヶ月しか生きれないと医師に告げられた時の彼、そして死が確実なことを知って家に帰った時に、タコを一番高くあげた彼。

私は勇気を見ました。苦痛や恐怖におじけず、この世の最後の瞬間までも立派に生きぬいたグレッグの中に。私は今になって、彼が一生懸命に痛みや恐怖を耐えぬいたということがわかります。

彼は日記の最後に証を述べ、私とその言葉を書きました。

「人生はぼくにとってすばらしいものだった。たくさんの失敗があり、たくさんの成功があったが、一番苦しいことは精神的な苦痛、つまり、同じ所にとどまって変化がないということだと思う。8月1日 土曜日、ぼくの心は疲れてしまっていた。息をするのも大変で、息を吸おうとするたびに痛かった。でも今は心が平安だ。毎晩が日曜の夜のような気がする。(日曜日の夜は家庭の夕べが開かれていました) ぼくの祈りは神さまから何度も答えていただいた。たくさんの恵みを感謝している。前にはずいぶん夢中だったスポーツも、ぼくがもうじき出くわす仕事に比べたら、何ということもない。さようなら、主がぼくの日記を読むあなたを祝福されますように。ぼくはちっともくやしくもうらめしくもない。心の中で、これが主のみところだとよく知っているから。主がたしかに生きておられることをぼくは知っている。主のいしめに従ってこそ、地上で幸福になれるということをぼくは知っている」。

私はグレッグの中に、真の勇気を見たのでした。



信仰箇条に要約される真理の福音を
靈感に満ちたパウロの手紙と比較す
る時、このような疑問がわく。この
各神権時代に生きたふたりの予言者
は、信仰箇条の共著者ではあるまい
か。

信仰箇条の共著者

ジョン W. ウェルチ



一般に言われているところと逆に、信仰箇条のうちの多くは、ジョセフ・スミスがウエントワース書簡として発表した1842年以前に書かれたものである。それらはジョセフ・スミスが生まれる前に書かれていた。簡潔に13の箇条にまとめられてはいないが、信仰箇条は直接あるいは間接に使徒パウロの書簡にすでに述べられているのである。ペテロの時代から「わかりにくい」(Ⅱペテロ 3:16)と言われているパウロの書簡の中から、福音の核心だけを凝縮してとりあげたことに、我々はジョセフ・スミスの天与の才を見るのである。信仰箇条とパウロの書簡との著しい関連性は、ふたりに神より与えられた使命と一致している。ジョセフ・スミスは福音を回復するために召された。彼の仕事は永遠の福音の原則を初期の使徒たちの教会で教えたと同じように教えることであった。使徒パウロは、特に異邦人に福音を教えるために召された。彼はイエス・キリストに会い、正しい知識を得て真理に改宗したが、ジョセフ・スミスも1820年にイエス・キリストに会った。ふたりの同様な経験と責任を知れば、根本となる信念や評価のしかたが似通っていることも不思議ではない。

パウロの名前は、共著者とも言うべく、信仰箇条の第13条に出てくる。

われらは、正直、真実、貞潔、慈善、高德なるべきこと、およびすべての人に善を行うべきを信ず。まことにパウロの訓戒に従うというを得べく、われらはすべてのことを信じ、すべてのことを望む。すでに多くのことを堪え忍びたれば、あらゆることを堪え忍び得んことを望む。もし何に

ても、徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり。

ここに言われている「パウロの訓戒」はⅠコリント13:7に出ている。「(愛は) すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」。双方の類似していることは一目瞭然である。またこの信仰箇条の最後はパウロの他の訓戒から来ている。

最後に、兄弟たちよ。すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあること、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい。(ピリピ4:8)

信仰箇条第一条：神会

信仰箇条第一条も、パウロの言葉に関係している。

われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。

パウロが神会をジョセフ・スミスと同じように理解していたことは、コリント人への第二の手紙ではっきりわかる。そこでパウロは神会の御三方を区別し、それぞれの働きを述べている。

この信仰簡条はパウロのキリスト観や、いわゆる恩寵による救いの教義や、「女性蔑視」の思想というものを考察するのではない。このような考え方により、伝道の使徒パウロの教えは非常な議論的的となってしまったのである。そうではなく、この信仰簡条はパウロの手紙に記された福音の根本的な原則を見出そうとするものである。我々は、プロテスタント・ファンダメンタリズムに対するパウロの影響が大であったことを知ると同様に、モルモン思想にも彼の深い影響があることを認識すべきである。

パウロの手紙の中には、他のだれかが書き、おそらくパウロが署名をして承認したものとされ、ヘブ

ル人にあてた書簡がその中に含まれている。そのことについて首相の演説文を例に出せば、原稿を首相自身が書かないとしても佐藤首相の演説は佐藤首相の演説であり、岸首相の演説は岸首相の演説となる。パウロの場合のこのような共著者については、興味ある問題である。アレキサンドリアのクレメント教父（AD150—215）はパウロがヘブル人にあてた書簡を書き、ルカがそれをギリシャ語に翻訳したと考えていた。とにかく、チェスター・ビーティー・パピルス（二世紀の新約聖書正典）において、ヘブル書はパウロの書簡中ロマ書とコリント前書の間の2番目に置かれている。

主イエス・キリストの恵みと、神の愛と、聖霊の交わりとが、あなたがた一同と共にあるように。（Ⅱコリント13：13）

信仰簡条第四条：福音の第一原則と儀式

信仰簡条には、一般にモルモン教会特有と考えられている福音の第一原則と儀式が述べられている。

われらは、福音の第一原則と儀式とは

第1 主イエス・キリストを信ずる信仰

第2 悔改め

第3 罪の赦しを受けるために水に沈めらるるバプテスマ

第4 聖霊の賜を授かるための按手礼

なることを信ず。

しかしパウロは初期の改宗者に送った手紙の中で「神の言の初歩（the first principles of the oracles of God）」（ヘブル5：12）について話している。彼は第一原則という乳を離れて肉という成人のとする食物へすすむよう教会員に教えたあとで、その第一原則というものをあげている。

…死んだ行いの悔改めと、神への信仰、バプテスマについての教と按手、死人の復活と永遠のさばき、などの基本の教…（ヘブル6：1，2）

ここでも、ジョセフ・スミスとパウロがほとんど同じ言葉で福音の第一原則を述べている。

信仰簡条第五条：権威

キリストの真の福音を行使するための基となるものは神権である。神権の儀式は信仰簡条第五条に述べられている。

われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行うためには、啓示と、権威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。

この言葉は初期の教会の教義と一致しているであろうか。確かに一致しているのである。二度目の伝道旅行でテモテを改宗させたパウロは、テモテに彼の持っている神権について語り、それをどのようにして受けたかを再び説明している。

長老の按手を受けた時、預言によってあなたに与えられて内に持っている恵みの賜物を軽視してはならない。（Ⅰテモテ4：14）

正しい神権の儀式はジョセフ・スミスとパウロの言葉の中に説明されている。正しい方法により正しい権能を受けたこのふたりこそ、神権の真の系統についてよく知っている人たちである。

信仰簡条第六条：神権の職

神権は組織だっている。それぞれの職にはそれぞれの職務と責任がある。パウロはそのことを知っていた。彼は自分が教会の指導者となる以前に何年もの間、神権者や使徒たちの行ないを見ており、そこから学んでいたからである。パウロは好きな支部であったエペソにあてた手紙の中で、教会は一つであるが多くの部分から成りたっていることを述べた。神権の各職は全体にとって大切な部分である。聖書の一箇所にはこう記されている。

そして彼は、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧者、教師として、お立てになった。(欽定訳エペソ4:11)

米国の学者たちによる聖書の現代語版(Revised Standard Version)では、上の聖句が「それは、彼の賜が、ある人を使徒とし、ある人を預言者とし、ある人を伝道者とし、ある人を牧者、教師とすることであつたからである」となっている。この聖句を信仰箇条第六条と比べてみよう。

われらは、教会には、初期の教会に在りたると同一の組織、すなわち使徒、予言者、監督、教師、祝福師等のあるべきことを信ず。

一致していることは明らかである。これは、各部分が総合されて、単なる総合以上に立派な全体ができて一つの例である。

信仰箇条第七条：聖霊の賜

そのもうひとつの例は聖霊の賜である。個人的にみたまの奇跡を経験した人は、みたまそれ自身の広大な能力を理解し、信じるようになる。ジョセフ・スミスは信仰箇条第七条で、そのようなみたまの賜を6つあげている。

われらは、異言を語る力、予言する力、啓示、示現を受ける力、病を医す力、異言を訳く力等の賜あることを信ず。

パウロも、みたまの賜をいくつかあげている。9つあげているうちの4つはジョセフ・スミスがあげた中に含まれている。

すなわち、ある人には御霊によって知恵の言葉が与えられ、ほかの人には、同じ御霊によって知識の言、またほかの人には、同じ御霊によって信仰、またほかの人には、一つの御霊によっていやしの賜、またほかの人には力あるわざ、またほかの人には預言、またほかの人には霊を見わける力、またほかの人には種々の異言、またほかの人には異言を解く力が、与えられている。(Iコリント12:8-10)

このことは先にあげた現代語訳聖書には、もう少しわかりやすく書かれている。

いやしの賜、予言の賜、異言をとく賜は、ジョセフ・スミスとパウロの両方が述べている。ジョセフ・スミスの語った啓示、示現を受ける賜は、パウロが述べたその他の賜、すな

わち、知恵、知識、信仰の賜と密接な関係がある。

信仰箇条第十二条：法に対する従順

次に信仰箇条第十二条を考えてみよう。法律違反の問題は、今日同様初期のキリスト教徒にとっても重要な問題であった。彼らもイリノイ州におけるモルモンのように、たとえそれにより自分たちの死を招くことになっても、皇帝や総督という法的権威者に従った。パウロはローマ人に「すべての人は、上に立つ権威に従うべきである」(ロマ13:1)、「あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果しなさい。すなわち、貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納め、恐るべき者は恐れ、敬うべき者は敬いなさい」(ロマ13:7)¹と勧告した。この言葉が信仰箇条と一致することは否定できない。

われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。

その他の信仰箇条

信仰箇条第一、第四、第五、第六、第七、第十二、第十三条について考えてきた。その他の箇条はパウロの書簡に同じ言葉で述べられてはいないが、書簡全体を通じて間接的な形で言われている。もちろんなかには見出しがたいものもあるが、ここで他の聖句を引用することはやめよう。「モルモン経」,「この(アメリカ)大陸に建てられ」という言葉は紀元1世紀のギリシャ語原本には載っていない。しかし福音のすべての事柄の背後に流れるものは、パウロの書簡の中に十分見出すことができる。

信仰箇条第二条：罪に対する罰

信仰箇条第二条は、パウロの言葉の二箇所を結びつけて構成できる。第二条は以下の通りである。

われらは、人は皆各々其身にてなしたる罪に対して罰を受け、アダムの咎に対して罰を受けざることを信ず。

この箇条には二つの基本的な考えが含まれている。第一は、人は自分のまいた実を刈ること、第二は、人はアダムの墮落に対して罰を受けないことである。

まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる。(ガラテヤ6:7)

アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。(I コリント15:22)

信仰箇条第三条：従順と贖罪

信仰箇条第三条には、人はキリストの贖罪により、福音のおきてに従うことによって永遠に生きると述べられている。このことはパウロの説教全体を通じての主要テーマである。彼の言葉のどれをとっても、キリストの贖いの力と従順が重要であることについての確信がうかがわれる。

神は、御旨によって、御子のうちにすべての満ちみちた徳を宿らせ、そして、その十字架の血によって平和をつくり、万物、すなわち、地にあるもの、天にあるものを、ことごとく、彼によってご自分と和解させて下さったのである。(コロサイ1:19, 20)

そして、全き者とされたので、彼に従順であるすべての人に対して、永遠の救の源となり、(ヘブル5:9)

信仰箇条第八条：すべての啓示は聖典である。

信仰箇条第八条には、聖典を神のみ言葉と信じるモルモン信条が表わされている。パウロはテモテにあてた第二の手紙の中で、そのことをはっきり述べた。

聖書 (All scripture) は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くに有益である。(II テモテ3:16)

「All scripture」とは、主が書くようにと命じたもう過去、現在、将来の啓示すべてを含む。パウロも他のどの預言者も、神はもはや啓示することをやめたとして、神の力に限界を認めたりはしていない。パウロのように数多くの啓示を受けた人が、そのような主との交流がのちの世の聖徒たちにも恵まれることを望み、信じていたことはもっともである。信仰箇条第九条は以下の通りである。

われらは、すべて神のこれまでに啓示したまいしこと、すべて今啓示したもうことを信じ、なお今より後、神の王国につきて多くの偉大にして重要なことを啓示したもうことを信ず。

信仰箇条第十条：集合と再降臨

信仰箇条 パウロの手紙中の参考箇所

1	II コリント 13:14
2	ガラテヤ 6:7, I コリント 15:22
3	コロサイ 1:16—20, ヘブル 5:9
4	ヘブル 6:1—2
5	I テモテ 4:14
6	エペソ 4:11
7	I コリント 12:8—10
8	II テモテ 3:16, II コリント 13:1
9	I コリント 2:10—11
10	ヘブル 12:22, I テサロニケ 2:19, 3:13
11	ロマ 2:14—16
12	ロマ 13:1, 7
13	I コリント 13:7, ピリピ 4:8

信仰箇条第十条には、末日におけるイスラエルの集合と輝かしいイエス・キリストの再降臨について述べられている。この二つのテーマはパウロの手紙に顕著に見られる。パウロはローマ人への手紙の10, 11章全体でイスラエルの家のことを語り、ヘブル人への手紙12章22節で新エルサレムについて語った。またテサロニケ人への第一の手紙で繰り返し主の再降臨を強調している。(2:19, 3:13, 4:16, 5:2)

信仰箇条第十一条：良心の自由

信仰箇条第十一条では、良心に従って神を礼拝する権利がすべての人に保証されている。パウロは神の礼拝を強制することの無益さを知っていた。また、法律と関係なく、各人は良心によって神を礼拝するようながされるということも知っていた。

すなわち、律法を持たない異邦人が、自然のまま、律法の命じる事を行うなら、たとえ律法を持たなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである。彼らは律法の要求がその心にしるされていることを現し、そのことを彼らの良心も共にあかしをして、その判断が互にあるいは訴え、あるいは弁明し合うのである。そして、これらのこと

は、わたしの福音によれば、神がキリスト・イエスによって人々の隠れた事がらをさばかれるその日に、明らかにされるであろう。（ロマ2：14—16）

それゆえに、「すべての人々に……何所なりとも、如何様なりとも、または何なりともこれを礼拝することを妨げず」というのである。神を礼拝する権利は、どんな時にもあらゆる人に与えられる特権である。

こうして、信仰箇条の十三ヶ条がパウロの書簡と密接な関係のあることを学んできた。8つの文章はほとんど完全にパウロの言葉から引用したものであり、他の文章も内容におい

ては確実に関係がある。それらはパウロの手紙に見られる主題と一致している。ジョセフ・スミスがパウロの教えを1ページの文章に凝縮して著わしたことは、彼に与えられた靈感と、福音に対する深い信仰を反映するものである。初期の使徒たちの教会の信仰箇条は、近代の予言者の経験の中によりがえり、我々はその信仰箇条を自分たちのものとしているのである。

注1 ペテロも同じように聖徒たちに勧めた。「王を尊びなさい」（I ペテロ2：17）

高 慢

ポール R. チースマン

レマン人サムエルがニーファイ人に悔い改めるよう警告した時、必ず破滅が来ると知らせた。なぜならば、

・・あなたがその時までいたずらに生涯を送って手に入れることのできない幸福を求め、罪悪をしながら幸福を求めたが、このような行いは私たちの偉大なる永遠の頭の性格である義にそむくからである。（ヒラマン13：38）

ニーファイ人は高価な衣服や宝石のようなこの世の物に心を執着させ、他人の労働を食い物にし、高慢に満ちていた。

ニーファイ人の背教はあまりにひどい状態であったため、人々の不義の理由が研究の対象となっている。当時の状態を知れば、私達は恐らく、社会や個人の生活において将来に予想される誤りを未然に防ぐことができるであろう。少なくとも、これは歴史の持つ一つの長所である。

背教者ニーファイ人のよこしまな行ないをしながらも幸福を探し求めるという目標が、どんな動機づけとなったか、前述のサムエルの言葉に留意していただきたい。「罪悪は決し

て幸福を生じたことはない」（アルマ41：10）ことをアルマが知り、息子に教えたように、間もなくニーファイ人も苦しみを味わうこととなったのである。

たしかに幸福を得ることは人間だれしもの目標である。ある者は神の計画に従って幸福を探し求め、またある者は神の方法が一番良いことを知っていても悪の力に従って幸福を求めるのはなぜなのだろうか。

ニーファイはニーファイ人の悪の理由を明快に説明している。

・・私の子孫がその高慢と悪魔の誘惑とのために、私の兄弟たちの子孫に征服されるのが見えた。（I ニーファイ12：19）

ニーファイが数え切れないほどの「悪魔の誘惑」の中で高慢を強調しているのは意味があると思われる。事実、高慢という言葉は背教に関係してモルモン経の中に60回以上も見られる。

主はいつも戒めに従順である者を祝福される。これは主の

計画の一部である。実のところ私達が律法に従うと二重の祝福がもたらされる。一つは、私達と共に地上にまします聖霊の慰めの力と導きによる祝福、二番目は来世において永遠の幸福を得ることができるという確信を持つ祝福である。しかし、私達は時々祝福を受けると、天父に感謝するよりも、賜物を受けたことにより自分を誇ってしまうという誤りを犯すことがある。ジョセフ・スミスが述べているように¹、私達は世の人々の前に立って力強く宣べ伝え、神のみたまのあらわれを受ける時、流れ出る言葉を自分の力だと過信して自分におぼれないよう注意する必要がある。

本当の謙遜はなかなか見つけにくいものである。人は自我（エゴ）に悩まされている。あやまることはどうしてそのように難しいのだろう。己れを低くして人々に感謝できないことが幾度あるだろう。自分の非を認めることはなぜそんなに難しいのだろう。自分の悪い行ないや、話の責任を取することは、難しい。たしかに、悪魔はこの高慢という武器を用いて人の心を神から離そうとしている。

私達は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員として、地上に大勢いるキリスト教徒、非キリスト教徒の中で自分をどのように思っているのだろうか。私達は本当に兄弟姉妹なのだろうか。それとも、信仰の異なる人々に対して誤った立場をとっているのだろうか。

世代の隔差とは何だろうか。両親はこの新しい世代が両親の世代よりも多くのことを早く学んでいることを認めるとしたら、顔が立たないのだろうか。両親しか経験できない分野、神が適切な導きを与えたもう分野において、両親以上に自分達は知っていると考えている若人がいるだろうか。

ヒッピー族の行動をある面から眺めると、今日の家族における偽善、真実の愛と霊性の欠如に対する反抗と考えることができる。ヒッピー族は平和の地として「花園」を求め、誤った道へと進んでいる。けれども目標は厳然としたチャレンジとして彼らの心の中にあるのである。若者の間のそのような動きを見守る両親は恐りに満ちた高慢な態度をとるべきでなく、むしろこの世代の欲求不満に目を向けるべきである。子供達の必要としていることに思いやりのある態度で接すれば、両親はもっと建設的な方法で子供達を助けることができるはずである。

私達は本当に現状に関心を抱いているだろうか。友好関係に基づいているとはいえ、教会内に高慢な徒党やグループを組んでいないだろうか。今日教会は、教会員が別のグループ



もし高慢とそれに伴う利己心を忘れることができるのであれば謙遜に神の戒めに従って生活しようと求める時に幸福と平安を見出すことができるに違いない

を作る必要のないように、補助組織を含めた完全なプログラムを準備している。私達の立場と責任に対する立場が最も大切である。野戦勤務をしているある軍人が最近教会員に一つのレッスンを教えてくれた。教会で祈りを頼まれると彼は「ありがとうございます」と言うのである。

現代社会は誤った自尊心を他にもいろいろ教えている。教会員は他人の掛け引きに感情を害することがよくある。高慢は不活発を招く。

モルモン経の中で、偉大な予言者が人々を改宗させた時、社会は繁栄した。しかしながら、富は常に大きなチャレンジのようである。誤った自尊心は繁栄している人々の弱点となる。歴史が示すように、高慢が入り込むと新しい世代は父祖の教訓を忘れ、その結果戦争と破滅がもたらされる。モルモン経中にこの話が何度となく繰り返して記されている。

「高ぶりは滅びにさきだつ」（箴言16:18）ということわざは、モルモン経のニーファイ人にとって教訓だったようである。私達は歴史からニーファイとサムエルの言葉に耳を傾け、高慢とそれに伴う利己心を忘れることができるだろうか。できるとすれば、謙遜に神の戒めに従って生活しようと求める時に幸福と平安を見出すことができるに違いない。

1. 予言者ジョセフ・スミスの教え P. 155, 156

自分を変える経験

リード H. ブラッドフォード



「夜あけだ、朝あけだ」¹

こうして、彼らがステパノに石を投げつけて……。サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた。……さてサウロは、なおも主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら、大祭司のところに行き、ダマスコの諸会堂あての添書を求めた。それは、この道の者を見つけ次第、男女の別なく縛りあげて、エルサレムにひっぱって来るためであった。ところが、道を急いでダマスコの近くにきたとき、突然、天から光がさして、彼をめぐり照した。彼は地に倒れたが、その時「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。そこで彼は「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねた。すると答があった、「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。あなたは無益の抵抗をして傷つくことはできない。」（欽定訳使徒7：59，8：1，9：1－5）

この経験の結果、サウロの全生涯は一変しました。彼は「諸会堂でイエスのことを宣べ伝え、このイエスこそ神の子であると説きはじめた」のです。（使徒9：20）

私たちひとりひとりに対する主の計画、主のみこころを正しく理解すると、私たちの生活は一変します。私たちの人生ははるかに豊かな「約束の谷」へ足を踏み入れます。この新しい生活には、論争ではなく、よいものを生み出す協力の態度があるのです。それぞれの人が自分に備わった賜や能力を伸ばし、それらを惜しみなく人にわかちます。自分を孤独だと思ふ人はいなくなり、神の家族の一員なのだと感じます。

もし一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ。
（Ⅰコリント12：26）

パウロとなったサウロは、その変化を経験しました。改宗以前には聖徒たちを迫害していた者が、救い主の教え、生き方、主の教会に従い、終始変わらぬ献身を捧げる者となりました。この世でのつとめを終えようとする頃、パウロは言いました。

わたしは、すでに自身を犠牲としてささげている。わたしが世を去るべき時はきた。わたしは戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした。
（Ⅱテモテ4：6－7）

私たちがまだこのような変化を経験していないならば、どのようにしたらそれを経験できるでしょうか。特に大切なことは次のふたつです。

第一に、私たちは真理を知りたいと望まなくてはなりません

ん。常に知らないことをさがし、自分から進んで、知識を増そうと日々努めねばなりません。

第二に、私たちは主イエス・キリストを信ずる信仰を表わさなくてはなりません。進んで勉強し、主の教えたもう原則を実践し、救いの儀式を受けるのです。

神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。(ヨハネ7:17)

これより後、犠牲としてわれに捧ぐべきものは、真にへりくだる心と悔いる精神なり。およそ真にへりくだる心と悔いる精神とを抱きてわれに来る者は、われこの者にみな火と聖霊とを以てバプテスマを施さん。(Ⅲネーファイ9:20)

私たち全員が、光を見、主のみ声を聞いたパウロと同じような経験をするわけではありません。またアルマが見たような天使も、予言者ジョセフ・スミスがお会いしたお二方も、おそらくは見ることはないでしょう。しかし先にあげたふたつのことをするならば、私たちも神聖な意義深い変化を経験できるのです。私たちは霊的、知的、情緒的、社会的に、まったく新しい成長をとげた自分を見出すことでしょう。その時私たちの心には平安と喜びが満ちるでしょう。

人々がステパノに石を投げつけている間、ステパノは「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」と言い、ひざまずいて大声で叫びました。「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。(使徒7:59-60)そしてステパノは死にました。サウロは、ステパノを殺すことに賛成していました。

サウロがパウロとなったことについては、ステパノの祈りが重要であったと、考えている人もいます。サウロはどうしても、ステパノの死んだありさまを忘れることができませんでした。

そのサウロの心は、次の出来事を話してくれた人の気持と似たものだったことでしょう。

だれからも好かれる素直でやさしい愉快な少年がいました。アンディー・ドレイクという名前でした。みんなはよく彼に難問をふきかけていじめましたが、私は何年もの間なぜそんなことをしたのかと考えてきました。やさしい心よりもいじわるな心が大きかったのでしょうか。それともただ軽率だったということなののでしょうか。あるいは人の心よりも人の上に立つことの方がもっと大切だと考えて、間違った満足感を感じたのでしょうか。本物のダイヤモンドよりもにせもののガラスの方が価値があると考えていたのでしょうか。

彼はよく冗談を言い、いつもどんな言葉にも、「ありがとう」というように大きな目ではほえみ返していました。きくと「私はテーブルからこぼれるパンくずをいただいてもうれしいんです」と考えていたのでしょう。5年生だった私たちのだれかが不満のはけ口を求める時、彼は進んでそのはけ口となり、それで仲間の一員にしてもらっていたのです。

私たちはアンディーをからかう歌を作ってはやしたてました。

前にも言ったように、私はなぜアンディーがそんなことをしてまで私たちの仲間に入れてもらいたいのかわかりませんでした。アンディーの父親が監獄に入っていたことや母親が洗濯女だったことを話した人がいたかどうか覚えていませんし、アンディーをみつめる母親の目に、悲しみが浮かんでいたことに気づいた人がいたかどうか知りません。

上の人へつらい、下の人にいばるという態度は小さな時に生じます。その時私たちが、自分たちは仲間に入る権利があるけれど、アンディーはお情けで入れてやるのだという態度だったことをはっきり覚えているので、私はそう思うのです。

しかし、私たちはだれでもアンディーが好きでした。彼が好きだったのです。つまりあの日、あの時までは……。私たちが何かを決めるやり方は、「彼は自分たちと違う」とか、「好きじゃないな」とかだれかが言いだしてそれが結論になるのでした。あの時はいったいだれが言いだしたのでしょうか。その時は最初にジェフがいやだと言いだしたのだと思います。しかし実を言うと、今だれが言ったのか覚えていません。だれかがそのことを言ったために、私たちの心に眠っていたいじわるな心がめざめたのです。だれが言ったかということは問題ではありません。みんながやっきになってはやしたてたのですから、私たちみんなの責任です。

その事件のあったあと、本当はあんなことをしたくはなかったのだと考えていたことを、今思い起こすと、つらく悲しい気持です。私は何年もの間そのことを考えていました。そしてとうとうある日、この言葉を見つけたのです。「いざという時にどっちつかずでいる人は、地獄の一番熱いところへやられる」それはいやな言葉でしたが、どうしても無視できませんでした。

ところで、事件のあった週末は、いつものように仲間が集まるはずでした。金曜日に学校がひけてから、その日はちょうど私の家の番だったので、仲間が私の家に集まり、近所の森へキャンプに行く準備をすることになっていました。お母さんたちがほとんどの準備をしてくれましたが、雑用を終えてから遅れてやってくるアンディーのためにいつものように余分の袋が用意してありました。

森にテントが張られた時には、みんなはすっかり山の住民になりきっていました。その時、私が当番だからアンディー

に君は呼ばなかったと言えとみんなに言われました。それまで私は、アンディーは小犬のように従順な目つきで私を見つめるので、私のことを他の人と違う特別な好意をもって見ていたのだと思っていました。私はそのことをうれしく思っていました。

私は今でも、その時アンディーが木のうっそうと茂った暗いまっすぐな山道をこちらに向かって走ってきた様子を、忘れることができません。彼は、リムに水まきホースをまきつけてタイヤにしたガタガタの婦人用自転車に乗ってきました。こちらに向かって来るアンディーのシャツは、木々の間から射す月の光をうけて影が万華鏡のように変化しました。彼はそれまでに楽しそうに見えました。いつも大人のような生活をしていたこの少年は、今や仲間の中で一息ついて小さな楽しみを得ようとしていたのです。

アンディーは、テントのところに立っている私に手を振りました。けれど私は挨拶を無視しました。アンディーは自転車をおりると、話しかけながら私のところかけよってきました。他の仲間は上手にテントの中に隠れて、静かでした。でも私は仲間が息を殺して聞き耳をたてていることを知っていました。

私は、どうしてアンディーはわからないのだろうか、私がアンディーに突っけんどんなことに気がつかないのだろうかと思いました。

すると急に気がついてらしく、彼の表情は見るからに変わり、おどおどした様子になりました。その全体の様子は「ひどく悪いことなのかい？でもいいだろ」というようでした。がっかりすることには慣れているらしく、そうショックではなかったようでした。

ところが、私の口をついて出たのは「アンディー、ぼくたち君に来てほしくないんだよ」という言葉でした。アンディーの目には大粒の涙が浮かびました。私の心にはその光景が焼きついているので、今もあざやかにその場の様子が思い出されます。私をみつめた彼の目は心に永遠に凍りついています。憎悪の目ではありませんでした。ショックや不信だったのでしょうか。それとも、私への哀れみだったのでしょうか。

ついに彼は、みじろぎもせず、抗議の言葉も口にせずに去って行きました。はじめは足もとがふらついて、なかばぼう然とした様子でしたが、自転車に飛び乗ると、スピードを出して走り去っていきました。

彼を見送った私がテントに入ると、だれかが、それはあの事件に一番関係のない無責任な子だったと思うのですが、あのアンディーをからかう歌を口ずさみ始めたのです。ところが、その子は突然、曲のなかばで歌うのをやめました。

するとみんなも静かになりました。みんな黙りこくったまま何も言いませんでした。しかし、みんなは知っていたのです。私たちは恐ろしくいけないことをしたのだということ

を。その時、私の心には主のみことばが思い出されました。

わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、………（マタイ25：40）

その時私たちはそれまで知らなかったことを理解しました。それは決して心からぬぐい去ることのできない経験でした。私たちは神の形にかたどって造られたひとりの人を、抵抗を許さない拒否という武器でいわば殺してしまったのです。

ある時私はアンディーが引越してしまっていることを知りましたが、彼は学校を休むことが多いので、いつ学校をやめたのかははっきりわかりません。どこかへ行ってしまうと、もう会うことがなくなったのでした。そのことで、私の苦しみは何倍にもなりました。あの事件ののち、彼を見ると私の方から避けていましたが、ずっと自分がどんなにすまないと思っているかをどうしたら彼に伝えられるかとひとりで苦しんでいたのです。私はその機会を失いました。今では、ただアンディーを抱きしめて泣くだけで充分だったのにと悔やまれてなりません。

私はその後アンディー・ドレイクに会いませんし、彼がどこに住んでいるかも知れません。私はこの15年間公立学校の教師をしています。その間に何百人ものアンディー・ドレイクに会いました。彼らは、昔あの時に私の心に焼きついて離れないあの同じまなざしで私を見つめました。私の良心は、神より与えられたたまものを伸ばす機会を受けずにいる人たちの顔に、アンディーのおもかげを見出すのです。ご存知でしょう。今の私は、彼らがどう感じているか、彼らのひとりひとりがどんなことを感じているか、よくわかるのです。なぜなら、私自身も私なりのアンディー・ドレイクだからです。

アンディー、あなたに話をする機会はもう遠くに行ってしまった。しかし、私は話そうと努めなくてはならない。幼なかった頃の友よ、私はあなたが、受けた犠牲に値いするものを学んでいるようにと祈る。あの日あなたがこの私から受けた悲しみを、神が祝福に変えたまわんことを。あの恐ろしい日の思い出が、それにより慰められるように。

アンディー、私は多くの誤ちをおかす。おそらくそう立派な教師ではないと思う。しかし、私の苦しみはこのようなことで和げられるのだ。私はキリストのみことばを思い出す。

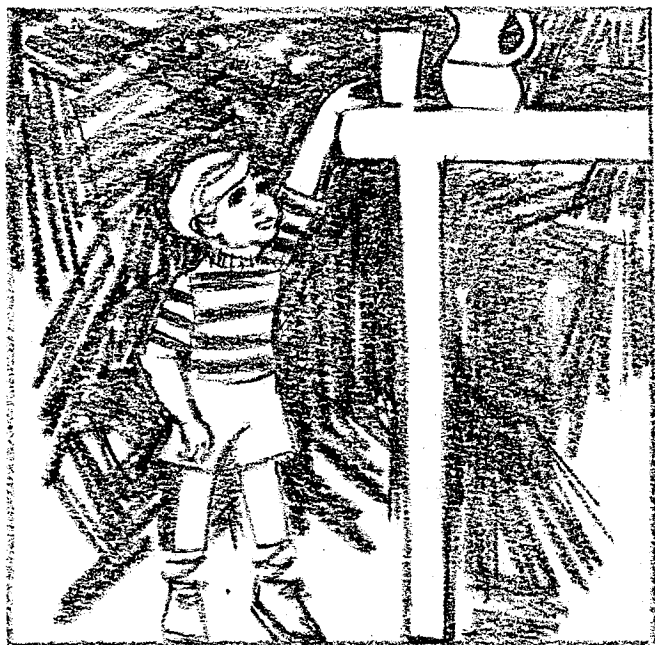
見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。（教義と聖約58：42）

そしてまた、私はもはや決してアンディー・ドレイクを殺しはしないと、君に言いたい。

けんちゃんには、かわいいあかちゃんのいもうとがいました。そのあかちゃんが、ベッドのうえでおおきなこえでなっていました。「だっこしてもいい？」とけんちゃんがききました。

「だめ、だめ。あなたはまだちいさすぎます。おとしたいへんですもの」とおかあさんがいいました。

けんちゃんはちょっとがっかりしました。けんちゃんはまだ三つでしたが、じょうずにだっこできるとおもっていたのです。ほかになにかすることがないか、けんちゃんはへやのなかをみわたしました。うばぐるまをみつけると、すぐその



ちいさすぎても おおきすぎても

サラ L. ジョンソン

うえにのぼりました。するとまたおかあさんのこえがきこえてきました。

「だめ、だめ。あなたがのったら、おおきすぎてうばぐるまがこわれてしまうでしょ。」

けんちゃんはまたがっかりしました。うばぐるまはとてもたのしそうにみえたので、のってみたかったのです。しかたがないので、こんどはだいどころにいきました。のどがかわいていたので、れいぞうこをあけて、ぎゅうにゅうびんをとろうとしました。するとこんどはおねえさんのこえがきこえました。「わたしがとってあげるわ。あなたはまだちいさすぎるから、こぼすといけないもの。」

おねえさんはコップにミルクをついで、けんちゃんにわたしました。けんちゃんはじぶんでついでみたいとおもいました。とてもやさしそうにみえたからです。ミルクをのみおえ



で、テーブルにコップをおこうとしたとき、コップがてからすべって、ちょうどけんちゃんのつまさきのうえに「ごつん」とおとをたてておちてしまいました。けんちゃんはなきだしました。

「さあさあ、もうよしなさい。そんなにおおきくなって、ないてるなんておかしいぞ。」とおとうさんがいいました。

けんちゃんはなきたくなかったのですが、つまさきがいたくてかなしくなったのでした。けんちゃんはなきやもうとしてめをこすりました。あかちゃんがないときは、おとうさんもおかあさんもあかちゃんをだっこして、なでたり、しずかにゆすったりします。またあかちゃんがへやのなかでなえています。おかあさんはあかちゃんのねているへやにいて、だいてつれてきました。あかちゃんをしっかりうでにだいたまま、おかあさんはゆりいすにすわってしずかにいすをゆらしました。けんちゃんは、あかちゃんとおかあさんがゆらゆらゆれているのをじっとみていました。そして、じぶんもそうしてもらいたいとおもいました。

「ママ、ぼくもやって、おねがい。」けんちゃんはおかあさんにたのみました。

するとおとうさんがいいました。「そんなにおおきくなっておかしいぞ。」

けんちゃんはほんとうにかなしくなりました。

そんなにおおきいのに！ まだちいさすぎるから！ そんなにおおきくなったのに！ まだまだちいさいから！ けんちゃんのあたまはこんがらかってしまいました。そしてあふれてくるなみだをとめることができなくなってしまいました。いそいでじぶんのへやにはしっていて、ベッドのしたにもぐりこむと、けんちゃんはしずかになきました。

おとうさんが、でかけようとしているのがきこえてきましたが、けんちゃんはベッドのしたからでできませんでした。

おねえさんが、ともだちとあそびにいこうとしているのがきこえても、まだうごこうとしませんでした。ただそこにいて、しずかにないていました。



すると、とつぜん「ママはね、けんちゃんがいすきなだよ」というおかあさんのやさしいこえがきこえてきました。ベッドのすぐそばにおかあさんがたっているのです。

「さあ、でてらっしゃい。ママはけんちゃんがほんとうにすきなだよ。」おかあさんはいいました。

けんちゃんはベッドのしたからこがりだと、すぐさまおかあさんのうでにとびこみました。おかあさんは、けんちゃんをゆりいすのところにつれていくと、だいたまますわってしずかにいすをゆらしました。

「ママにはね、けんちゃんがつまらなそうなのがよくわかるわ。わたしたちがみんな、けんちゃんはなにをするにもおおきすぎるし、ちいさすぎるとかんがえているようにおもうでしょ。でもね、けんちゃんにできることはたくさんあるのよ。」

ふたりは、けんちゃんにできることをいろいろかんがえてみました。おかあさんのおつかい、あかちゃんがおもちゃをなげたとき、ひろってあげる、ごはんのじゅんぴのおてつだい、おかあさんがあかちゃんをおふろにいられているとき、タオルやあかちゃんのきものをじゅんぴしてあげる、おかあさんがミルクをつくっているあいだに、あかちゃんをあやしてあげることなどです。

おかあさんは、けんちゃんをしっかりだいていいました。「みんな、けんちゃんのがだいすきなよ。パパもママもおねえちゃんも。そして、てんのおとうさまもけんちゃんのことをあいしていただくのよ。だから、こうして、てんのおとうさまは、パパやママにけんちゃんをおくってくださったんだわ。こんなかわいいおとこのこをおくってくださった、てんのおとうさまに、パパもママもまいにちかんしゃしているのよ。けんちゃんは、ちょうどパパやママがほしいとおもっていたようなこどもよ。」

「だけど、ぼくもっとおおきくなりたいな。」とけんちゃんがいいました。

「いまは、それでちょうどいいのよ。」とおかあさんがけんちゃんにいいました。「すこしずつおおきくなっていて、いまだきかないようなこともかんたんにできるようになるのよ。もうすぐ、じぶんひとりでじぶんのコップにミルクをつげるようになるし、もうすぐあかちゃんだってしっかりだっこできるようになるわ。ほんとのこというとね、けんちゃんはいまでももうそのようなことができるとママはおもっているのよ。」

けんちゃんは、おかあさんのせなかにてをまわしていいました。「ぼく、ママだいすき。」

おかあさんはけんちゃんをソファのうえにおろしました。そしてあかちゃんのねているへやからあかちゃんをつれてきて、けんちゃんのうでにだかせました。おかあさんもそのそばにすわりました。けんちゃんはあかちゃんをそうっと、ちゅういしていただきました。そしてにっこりしました。けんちゃんはいうれしきでいっぱいでした。



若い羊飼

ヘレン ベイ ギボンズ

朝 日が空にのぼりはじめたころ、リトル・クリケットは、谷間のはるか下の方に砂ぼこりがたっているのを見ました。おかあさんのサニとお兄さんのシトソシェが交易所に出かけていったのでした。子羊が一匹はぐれてないいます。急いで谷をおりてその子羊を囲いにもどさなければ、二人の乗っている古い小型トラックが、ゆっくりと砂漠の中にきえていくのを見おくることができません。リトル・クリケットはまたおいてきばりにされてしまったのでした。

リトル・クリケットはまだ小さかったころ、そう、まだ羊の番もできないほど小さかったころ、おとうさんやおかあさんといっしょに、よく交易所に出かけていきました。そのころのことを、リトル・クリケットは今でも夢に見るのです。銀やトルコ玉の山、店のたなにあるさまざまな目新しい品物の形やにおい。けれどおとうさんがなくなってから、おかあさんはシトソシェを一家の柱としてたよってきました。シトソシェは背も高く、大人のようにたくましく、またとてもハンサムでした。それにくらべリトル・クリケットは身体が弱く背も低いので、自分は少しもおかあさんの役に立っていないと思っていました。

「おかあさんは、交易所に行くのにぼくの助けが必要なんだ」とシトソシェはリトル・クリケットに自まんして言いました。「粉や豆をトラックに積むのは、力の強い人じゃなきゃできないだよ。おまえはそれだけの力がないから、せいぜい羊の番でもしていな

い。」

山の中腹から、トラックのあげる砂ぼこりを目でおいながら、リトル・クリケットは悲しくなりました。自分も、だいすきなおかあさんを助けて役に立ちたい、そう思ったのです。その朝早く、まだ太陽がのぼらないうちに、おかあさんはリトル・クリケットを起こして、暖かい朝ごはんを食べさせました。そしてリトル・クリケットが羊の番をしに行く前に、おかあさんは短いお祈りをしました。

「わたしたちの家をおまもり下さい。わたしたちのまへに、平安がありますように。またわたしたちのまわりのすべてのものに、やすらぎがありますように。」

リトル・クリケットは、ずっと前からよく聞いてきた、おかあさんのこのお祈りが好きでした。けれども、もっとすきなお祈りがありました。それは、時々家に話しにやってくる宣教師たちのお祈りでした。彼らはリトル・クリケットのことを「かわいい兄弟」とよびました。そしてリトル・クリケットは、宣教師たちの話す不思議なことをいろいろ考えてみました。宣教師たちは、丘や星や地上のすべての生きものをおつくりになった偉大な天のおとうさまのことについて話してくれました。そして、そのおとうさまは、どんなに小さな羊でも、死にかかっているすずめでも、すべてのものをみまもってくださると言いました。宣教師たちは、まるで偉大な天のおとうさまが家の中にみんなといっしょにいるかのように、話しかけるようにしてお祈りしました。「天のおとうさま」宣教師たちはよくそう言いました。リトル・クリケットは何も見ることができませんでしたが、心の中が暖かくなり、天のおとうさまがそばにいるのを感じました。

羊のむれが、草を食べながら山をのぼり、そのあとをリトル・クリケットが見まもりながらついていきます。リトル・クリケットは歩きながら、谷間の方に目をやりました。しかしトラックも、砂ぼこりも、もう見えなくなっていました。高い牧草地につづくけわしい道をのぼる前に、羊たちに水を飲ませて少し休ませようと、リトル・クリケットは大きな泉のあるところとまりました。そして、あす交易所から戻ってくるシトソシェがやって来て、交代するまでその高い牧草地にしようと思っていました。二人は、おかあさんが毛布をつくるのに必要な羊毛やシチュー用のマトンを手にいれるために、夏の間ずっと交代で羊の番をしたり、世話をしていたのです。リトル・クリケットはたった一人で山にいても、こわいと思いませんでした。そのあたりでは、もう長い間やじゅうを見かけた人が出ていなかったからです。

その大きな泉のそばで羊たちとぶらぶらしていると、ふと地面に何かの跡を見つけました。それはやわらかな土の上に見られる動物の足跡のようでした。ずっと昔、リトル・クリケットはおとうさんから動物の跡のつけかたを習ったことがありました。彼はかがんで、その新しい足跡を調べてみました。そして思わず助けを求めに走り出した気持ちになりました。それは大きなアメリカライオンの足跡だったのです。丘の少し上の方に目をやると、そこでは羊が一匹死んでいました。血まみれの皮や骨を見ると、まだ殺されて間もないことがわかりました。おそろきくのうの夜でも殺されたのでしよう。その大きな殺し屋のライオンは、リトル・クリケットが羊の世話をしている、牧場のそばの木にひそんでいたのに違いありません。

リトル・クリケットの胸はドキドキしてきました。暗くなってもアメリカライオンが羊のにおいをかぎつけて殺しにやってくるうちに、羊を山からおろさなくてはならないのです。「アメリカライオンなら、リトル・クリケットぐらい一口で食べてしまおうだろうな。」彼は、ホスティーン・ヤッツィがじょうだん半分におかあさんに言っていた言葉を思い出して、身ぶるいました。羊たちを集めて移動させるために、岩をはい登っていると、しげみの中に、生まれたばかりの羊の赤ちゃんを見つけました。生まれたばかりで、そのよるよるした足では立つこともできないのです。おかあさん羊はそばで殺されていて、その子羊はおなかをすかしているのです。リトル・クリケットはどうすればよいのかわかりませんでした。どこか木陰で、アメリカライオンがねらっているかもしれないのです。いつまでもこの子羊にかまっていることはできません。急がなければ……。けれどリトル・クリケットは、天のおとうさまがどんなに小さな鳥でも見守ってくださることを考えて、自分もこの死にかけている子羊のめんどろをみてあげなければいけないと思いました。

すすり泣きをしながらい子羊を腕にだきかかえると、リトル・クリケットは声を出して、ものうさそうな羊たちを集めて岩の上をつまづきながら進みました。陽が落ちてきて、地面にうつる影も長くのびてきました。リトル・クリケットはいっしょうけんめいに、羊たちを谷間につづくほこりっぽい道へと追いやりました。羊たちはむりやり急がれるので、うるさくなりました。そしてリトル・クリケットも、腕に子羊をかかえながら羊を追うのに疲れてきました。こうしてやっと羊たちを家の囲いの中に安全に入れた時は、もうほとんど暗くなっていました。おかあさんのサニもシトソシェもまだ戻ってきていませんでした。リトル・クリケットは、子羊たちがのみやすいように、おかあさんが特別に作っておいたかわの袋にあたためたやぎの乳を入れてのませました。それから家の中にあかりをとめて、子羊が休むことができるように、あたたかいベッドを作ってあげました。

リトル・クリケットは、子羊を、そして家の羊たちを救ったのです。おかあさんのサニの助けをするのに、そして天のおとうさまの助けをするのに、背が高いことも、強いことも、ハンサムなことも関係ないようです。静まりかえった夜に、トラックのけいてきが聞えてきました。おかあさんが戻ってきたのです。あしたになったら、おかあさんは男の人たちにたのんで、殺し屋のアメリカライオンのあとをつけてもらうことでしよう。

リトル・クリケットの心にふたたび暖かな気持ちもどりました。サニの朝のお祈りはききとどけられたのです。あたりはほんとうにしずかでやすらいでいました。

みなさんは神さまの大切な子供です。

御霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さい。

ローマ人への手紙 8章16節

みなさんは神さまの子供ですから、リトル・クリケットのように大切なことをすることができるのです。みなさんにできるものにどんなものがありますか。



若 者

十二使徒評議員会補助

マリオン D. ハンクス長老

エレーン・キャノン

若 い人たちは精神的、知的、霊的、肉体的、および社会的に成長しなくてはならない。考える時間や遊ぶ時間、学ぶ時間が必要である。活動に参加して自己を表現し、心をきたえ、人格を豊かにし、才能や技術を伸ばし、指導力を身につけることが大切である。また、神に対する理解を深め、隣人に奉仕し、自分を律し、探求し、前進しなくてはならない。働き、忍耐し、犠牲を払い、愛すること。自制を学び、困難や誘惑によく対処することを学ばねばならない。そして主のため、み国のために働く意義多い目標を定めることが大切である。

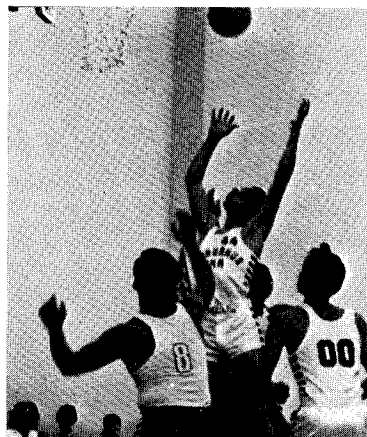
末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、パウロがテモテに言ったように、若者は「言葉にも、金話にも、愛にも、意気にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範に」なり、自分の持っている「賜物を、軽視してはならない」ということを信じている。（欽定訳Ⅰテモテ4：12，14）

そしてまた、信じるだけでは不十分なことをも承知している。真理についての知識は救いに欠くことができないが、ただ知識だけではこの世や来世において人は十分高められない。高度な原則を日々の生活に実践してこそ、人は高められるのである。そのため末日聖徒イエス・キリスト教会の活動は、各個人の必要に応じて福音の原則を適用できるよう、周到に準備されている。教会活動のすべてに活発に参加する教会員は、毎日の生活であらゆる方面にわたって導きを得、進歩するのである。

知的に成長する若者
左は、実験室で学ぶ
ポリネシアの学生。

霊的に成長する若者
右は、聖餐のパスを行なう
ハワイの若者

下は、インディアン
の小屋を訪ねる宣教師。



肉体的に成長する若者
下はメキシコの若者のピ
クニック風景。



社会的に
成長する
若者
左は夕食
会に集ま
ったスウェーデン
の若者。

最もすばらしい特権

マリリン・マクミーン・ミラー

ある日曜日の朝、教会へ行く途中で、数人の少年たちが校庭でボール遊びをしているのを見かけました。破れたジーンズとシャツを着て、メンバーの一人がゴールラインに入った時には楽しそうに手をたたきながら歓声をあげていました。ほんとうに楽しそうな試合で、日曜日でなかったらすばらしい活動に違いないと思いました。

私の知っている少年たちも何人かいました。それは末日聖徒の子供たちでした。しかし彼らは、人生でもっともすばらしい祝福すなわち教会へ行く特権を逃しているのです。恐らく教会へ行くことを、特権ではなく束縛あるいは重荷に感じていたのでしょう。

思い出すと、私にも、そのように感じられた時がありました。しかし、私の人生に特別な時が訪れ、末日聖徒であることがいかにすばらしい特権かを知ったのです。

子供の日曜学校の生徒だった頃の私は、安息日を聖く保つこと、あるいは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員となった時に家族が受けた責任などにはほとんど関心がありませんでした。両親と一緒に神殿に行って結び固めを受けたときはうれしかったのを覚えていますが。プライマリーも大好きでした。しかし、長い集会や断食、話をさせられたり什分の一を払うことはいやでした。

弟が生まれた時、私たちの住んでいた地区にはモルモン教徒がいませんでした。私の家は中流の3階建てレンガ造りで北にスラム街、公園を隔てて高級住宅街を控え、両極端な階層の間に位置していました。

私は、公園の向こうの美しい家に住む金持の子供たちと友達になることばかり考えていたので、他のことは何も頭にありませんでした。ですから、ある家の少女から日曜日に彼女の両親と共に農場へ行って乗馬をするように誘われた時にはうれしさのあまり興奮してしまいました。日曜学校へ行けないことも忘れていました。母の言葉で、その日曜日子供の日曜学校で聖句を暗唱する約束があることを思い出した時は、ほんとうにがっかりしました。

どうして教会へ行かなければならないのか。私がなぜ聖句を暗唱しなければならぬのか。私の友達の中には、教会へ行ったり、什分の一を払ったり、あるいは断食をする必要のない人がいるが、それはどうしてだろうか。私たちが教会に入る前には、自分の思う通りにできたのに。私はその時束縛を受けているように感じて、ひどくうらめしい思いをしまし

た。

やさしく賢明な母は、簡単にこう言っていました。「教会から離れたくはないでしょう。最もすばらしい特権なのよ」

私はそうは思っていませんでした。しかしあの少女の家に行くと、農園へは続けて何回かの日曜日の午後になたて出かけるので、もし私が暇なら、来週の日曜日にも行って欲し



いとのことでした。

次の週に弟が生まれましたが、母の容態は非常におもわしくなかったのです。母は病院で何日も生死の境をさまっていました。

夕暮れになると私たち3人の女の子は、おもてに出て、さくにのったり、舗道を通る車の音を聞きながら父親の帰りを待ちました。家に帰って来る父の顔には、いつも苦悩と疲れの色が見えていました。その度に、私たちは父の話す母の容態にじっと聞き入ったものです。いつも同じ危篤状態でした。

次の日曜日の午後がやって来ました。私はためらいがちにジーパンと長ぐつをはいて、窓から公園の方を眺めながら父が病院から戻るのを待っていました。やがて、父がゆっくりと芝生を通して家に入ってくるのが見えました。

「お母さんはどう？」で私たちは、おそるおそる尋ねました。

父はしばらくの間黙っていました。ついにゆっくりと自分に言い聞かせるように、「もし天のお父さまがお母さんを召されるのなら、それは正しいみこころであるという信仰を持たなければいけないよ」と言いました。

「お母さんはずうっとどこかへ行っちゃうの？」妹が聞きました。

父は妹を抱くと言ったのです。「お前のお母さんはどこへも行かないよ。私たちは末日聖徒になっていてほんとうに良かった。神殿で家族の結び固めをしたことは、お母さんがいつも私たちのそばにいることなんだよ。お母さんは少しの間天のお父さまの所に行っているけれど、私たちはいつも一緒なんだよ」父の目に涙が光っていました。「私たちが天のお父さまの近くにあり、お父さまの教会に属しているということは特権なんだよ。」

その時、私は母のにこやかな目とやさしい笑みを思い出していました。そして、「教会から離れたくないでしょう。最も素晴らしい特権なのよ。」という母の声が聞えたように思いました。

私は2階へかけ上るとジーパンと長ぐつを脱いで、日曜日にはふさわしい洋服を着ました。

その夜聖餐に与った時、私は心の中で天父に感謝の祈りを捧げました。そして、私がここにいて聖餐をいただき、末日聖徒として天父に近くあるという特権を感謝しました。

私がそんなに熱心に祈ったのはその時初めてでした。毎晩ベッドのかたわらで天父に祈りを捧げ、聖餐会に行くこと、什分の一を払うことを誓いました。もし母の命を救って下さるのなら、よい末日聖徒になるよう努力しますと約束しました。

私たちは祝福を受け、母の命は救われました。しかも私は2倍の祝福を受けたのです。末日聖徒であることがいかに素晴らしいことか、さらに教会へ行くという特権を知ったのです。

「清い」という言葉

リチャード L. エバンズ

平安や、自尊の心をあなたに約束するひとつのすばらしい言葉がある。それは「清い」という言葉である。清い手、清い心、清い家庭、清い水、清い空気、そして清い精神、清い道徳観、なんとすばらしい言葉であろう。心は環境に左右されやすい。もし環境が心に左右されるものならば、世の中は逆の歩みをしていたに違いない。我々が清くあるようつとめるならば、あらゆることに望み豊かな未来が開ける。マッケイ大管長は言った、「どの女性にも、陽光のように清らかで生命のように神聖な、神より恵まれた美しさがある。すべての男性の愛する美、すべての男性の心をひく徳。その美しさとは純潔である」¹、「美しく、つつまじやかで清らかな女性は創造の傑作である」²。パウロは言う、「……御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。……御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって……」³。またヒュー B. ブラウン長老はこう述べた、「我々の思い、言葉、服装、すべての行ないは、体を神の宮として尊ぶという我々の信仰を示すものである。パウロはそのことを、『だから、彼ら（俗世の人々）の間から出て行き、……汚れたものに触れてはならない。触れなければ、わたしはあなたがたを受け入れよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる』⁴と語っている」⁴。悪は清くない。悪はけがれた心、けがれた道徳、けがれた行ない、けがれた環境に巣くうのである。

「清らかさは神聖さに次ぐ」（ジョン・ウェスレー）という古いことわざは、今も真実である。思いの清らかさ、人の、服装の、言葉の清らかさ。「清いことは力」であると共に、平和であり、安心であり、自尊である。若者が己れを清く保つならば、最高の高さにまで達することができる。「清らかな若者は、いかに光輝あふれ、天使に近いことか」⁶。己れを清く保とうとつとめる我々を、神はたしかに助けたもう。

1. デビッド O. マッケイ、「インストラクター」1966年8月

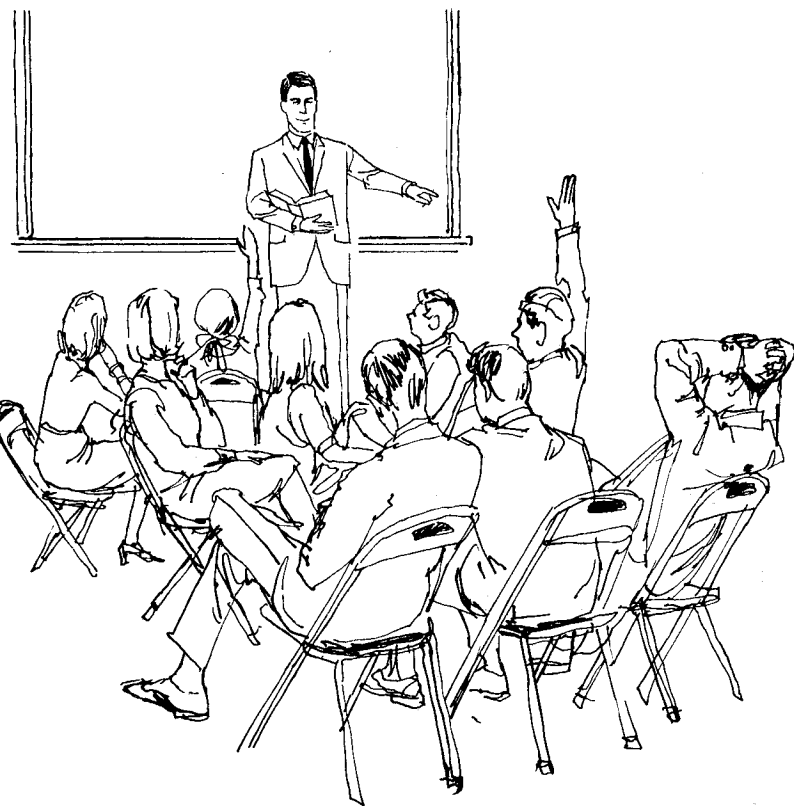
2. 同上

3. ガラテヤ 5:16, 22

4. ヒュー B. ブラウン「You and Your Marriage（結婚とあなた）」P.66

5. II コリント 6:17, 18

6. 大管長会、1942年4月6日



質問の技術

スタンレー M. グラボウスキー

教

師は主題を提出する場合にも生徒をテストする場合にも質問を用いて、レッスンを進める上で大切な道具にしている。立派な教師と言われる人は概して質問する技術に身をつけているようである。経験を積んだ教師は質問のし方を知っており、質問によって生徒の関心と好奇心をかき立て、注意を主題に集中させ、討論を活発にし、生徒の考えを導くと同時に生徒から実例や意見を出させる。

質問に対する答え方は質問のされ方と質問された時の言葉の使い方によって決まり、いずれも大切である。最初にいろいろな質問の種類について考えてみよう。

1. 事実に関する質問。これは最も簡単な種類の質問であり、通常情報を得、生徒の知識をテストするために用いられる。これらの質問は、新聞記者が最初に学ぶ一いつ、だれが、どこで、何を一という4つの言葉で始まる。たとえば、「イエスはどんな方でしたか」「聖書の地とはどこですか」「戒めとは何ですか」等というように。

2. 拡大質問はつけ加えるような事柄を知らせるために用

いられる。見過ごしにされるかも知れないような点に生徒の注意を促す場合に効果がある。こういった質問は、「その他に何が……」「なぜですか」「なぜそうではないのですか」というような言葉で始まる。

3. 証明を促す質問は古い考えに挑戦させ、新しい考えを発展させる方法である。普通、なぜ、どのようにという言葉で始まる。たとえば、「クリスチャンはなぜ日曜日に礼拝するのですか」「どうして聖書が神の靈感によって書かれた言葉だとわかりますか」等である。

4. 調整質問は生徒の考えを導くために最も良い方法である。またグループの意見を一致させるためにも良い。「山上の垂訓が今日にも応用できると皆さんは思いますか」「石田姉妹と川原兄弟が発表してくれた二つの意見を結びつけるにはどうしたら良いでしょうか」等が調整質問の例である。

5. 仮説質問または「かこつけ」質問は新しい創造的なアイディアを導くために用いられることがある。もしとか仮にという言葉で始まることが多い。たとえば、「もし明日世の終りの日が来るとしたら、あなたはどうしますか」というような質問である。

6. 択一質問は主として結論に到達させるために二つ以上の方法を評価させる方法である。「私たちはどちらを……べきですか」「これらのどちらが……」という言葉で始まる。

質問を選び、言葉を考えることで、ようやく半分が終わったのであり、教師は次にだれに質問するかを決めなければならない。質問のし方には基本的に言って三つある。

第一、間接質問は生徒個人よりも全体に向けられる。生徒は自由に答える。この種の質問は全員に考えさせ、特定の生徒に照準を合わせない。

第二は直接質問で、指名する。質問をしてから生徒を指名するよう注意しなさい。指名を最後にすると、生徒全員が注意を向け、考えるからである。直接質問は発言をしない生徒を討論に加わらせる上で効果がある。

第三は反対質問または再直接質問（討論の際に用いることができる）で、質問をした生徒あるいは、他の生徒、全員に質問をする。別の生徒または生徒全員に再び質問を向ける場合は、リレー質問とも呼ばれる。例をあげれば、「松山姉妹

あなたはそのことについてどう思いますか」。

その他に、教師が質問をする際に留意すべき点が二、三ある。質問はできるだけ短かく、簡潔にしなければならない。前の質問と解答に関連がなければならない。生徒の能力の限界を越えてはならない。

質問の種類、語法、対象を知る以外に、適切な語調、顔の表情、身振りを考えることも、質問の技術に含まれる。これらの要素は生徒の信頼や理解に影響を及ぼすことがある。

生徒との意志の疎通に関し、最後に最も重要な点があげられる。それは聴くことである。聴くことは、生徒を理解するために質問をすることと同じ位重要である。

積極的に聴くとは、言葉、感情、態度を理解しようとして聴くことであり、生徒が自分を表現し、質問に答えた言葉の裏の意味を悟ることである。生徒が実際に使った言葉をどのように理解しているかを知る糸口になる。

教師はうなづいて見せたり、「そうですね、そして」等と言って聴いていることを示すことができる。生徒の答えを言葉を変えて述べたり、まとめたりすることは、一つの積極的に聴く態度の中に含まれる。

質問のし方と聴き方を知っていれば、教師はもう何も問題がないとは言えないが、よく準備する教師にとってこれらの技術は大きな助けとなるであろう。

聖餐の聖句伴奏曲

DELMAR H. DICKSON



6月聖餐の聖句

大人日曜学校

子供日曜学校

また真理を知るであろう。そして真理は、あなたに自由を得させるであろう (ヨハネ 8:32)

神は自分のかたちに人を創造された

(創世記 1:27)



(1969年10月2日扶助協会年次総大会
ステーキ部管理会集会での説教)

神

権は神が幸福な家庭生活の基として確立されたものである。そして主はその恵みがすべての家庭にもたらされるよう望んでおられる。

伝道によって改宗した家族であれ、何世代もの間教会に連なっている家族であれ、神権の恵みは、キリストの福音を理解し、キリストの福音に従って生活する時にはじめてもたらされる。

特に神殿の儀式が強調されている。みたまの導きを受けている我々の宗教を立証している事実と神殿結婚の正しい意味を理解する時、この神聖な儀式が家庭生活における真の成功の基盤であることを知る。それはこの世での幸福、来世での昇栄の基でもある。

神殿の儀式は神権を持てる家族にとって確信となり、正しく理解されるならば、義なる生活、神を畏れる生活への扉を開く。これに代るものはない。

このように福音に従った生活をするならば、福音に伴うあらゆる祝福が必ずもたらされる。まさしく天の窓が開かれて、あふるばかりの恵みが与えられるのである。

神聖な神殿内において、真に忠実なる者に天の恵みが与えられる。そして、

その神聖な場所から、我々が強い家庭生活、夫婦間のやさしく、神聖な関係を築くための祝福を家庭へ持ち帰る。

神権に関わる神殿の儀式の祝福は男女とも同じであり、何の相違もない。

結婚の儀式での結び固めの祝福は男女に差別なく与えられる。

福音を通じて再び執行される従順の誓約は男女とも全く同じである。教会に標準は一つしかない。

また約束された祝福も同じである。主が従順なる者に天の窓を開いて、あふるばかりの恵みを与えと言われたが、主はこれらの祝福を分けて、ある祝福を男に、その他を女に与えられるだろうか。

神は人をかたよりみられない。

たとえば、若い二人が神の宮居で結婚する時、二人は共に神権のもとに同じ誓約に入り、神の恵みに関して同じ約束を受けるわけである。

この夫婦がこの神権を二人の新家庭に持ち込むことは、どういう意味を持つであろうか。

それは、神の権能、祝福に関わる誓約、家庭を守り、築き、清める権能、病気の際のいやしの力、子供達を教育するための靈感、家庭を宮居、避け所、平安の場にする聖めの力を家庭に持ち込むことである。

このような家庭が築かれるならば、それは単に家庭が食物をとり、眠り、車をとめておくだけの場ではなくなる。

それは家族が永遠に結ばれる永遠の関係のはじまりである。

ここで、しばらく以下のことを考え

神 権

てみよう。

夫婦は永遠に結び固められるが、何によって結び固められるのだろうか。聖なる神権である。

子供達は生、死、復活により両親に結び固められる。何の権能によってであろうか。神権である。

幼児が病気になった時、何の権能によりその家庭内で祝福を受け、いやされるのだろうか。神権の権能である。

また家庭内に死が侵入したとしたら、亡くなった人はどんな永遠の権能によって、来世における喜びにあふれる再結合の時に、その家族との関係を継続できるのだろうか。神権の権能である。

我々がもし福音の中に生活するならば、家庭生活のあらゆる面で神権の力を受けることができる。このような家庭における生活規範とはいえば、神が権能を与えたもうた僕達によって与えられた神権に関わる標準に一致することである。

このように家庭は、神権の影響のもとに家族の祈りを行ない、神権により育まれたふさわしい雰囲気の中でゲームをし、歌を歌う限りにおいて、神の導きを受ける神聖な場所となる。

子供はすべて、かよい木と同じように神権の力のもとに義の道へと導かれ、影響と教えを受けなくてはならない。

純潔の力と罪の虚弱作用は神権の光に照らすと著しい相違を見せる。神権の影響のもとに知恵の言葉は愛され、純潔は道徳のモットーとなり、正

の恵みと力

十二使徒評議員

マーク E. ピーターセン

直はゆるがせにできない標準となる。

霊性はそのような家族の間に宿る。神なしに本当の喜びはない。神が生きてましますことの証はこのような家族全員にもたらされる。それは神がその家庭の一部を占めているからである。神の力がそこにあり、神の喜び、平安、深い満足、繁栄、守り、我々の心の中に光として輝く神の英知がそこにある。

そして、幼な児が成長し、神権の恵みを自ら受けるようになると、我々は神の聖なる権能が絶えず広がりつつあるのを見ることができる。それは世代から世代へ、暗やみから驚くべき光に招き入れて下さった神をほめたたえる聖なる国民、神につける民になるまで続くのである。(1 ペテロ 2 : 9 参照)

我々は神権の権能をすべての家庭にもたらし、生涯神権を尊ぶよう努力すべきではないだろうか。

神権は人に与えられた神の権能と定義されている。

我々はこの権能と神聖な影響力をすべての家庭の一部とすべきではないだろうか。

夫たる者は神権を尊び、神権の召しを全力を尽して遂行すべきではないだろうか。

息子たる者は正しい聖任による神権を得ようと求め、神権を敬い、神権の召しを全力を尽して遂行すべきではないだろうか。

また、母親、妻、娘は、夫、息子、父親、兄弟に授けられている神の権能を敬うべきではないだろうか。

妻、母親あるいは娘はなぜこのように神権を敬うべきなのだろうか。

家庭内で正しく敬われる神権は清めの力を持ち、妻、母親、娘も神権に伴う平安の精神を通して恵みを受ける。

神権が正しく理解され、尊ばれ、神権の影響力がみなぎっている所で、家族のいさかい、家庭の分裂、崩壊、夫婦間の不貞、離婚はあり得ない。むしろ、一致と喜びがあるだろう。

キリストは平和の君 (イザヤ 9 : 6) ではないのだろうか。神権はキリストの権能ではないのだろうか。神権は本当に神の御子の神権の聖なる神権 (教義と聖約 107 : 3) ではないのだろうか。

それでは、神権を我々の家庭内にもたらし、神権が平安と幸福の源であることを知ろうではないか。

それゆえ、姉妹達よ、神権の召しを全力を尽して遂行するよう、召された職に正しく行動するよう夫を励まさない。

息子が神権の本当の意味を理解し、神権を敬うように、聖任の日を待ちこがれるよう教えなさい。

権威を持って家庭を管理するよう夫を励まさない。夫が家族の神権の管理者であることを認めなさい。これは家庭の一致という大きな報いをもたらすことになるだろう。

夫があなたがたの望んでいるような家族の族長となるための手助けができるようにあなたの影響力を活用なさい。

平安は神より出ずる。神こそその源

である。あなたと同じく夫も神の僕である。聖任を通して夫に与えられた権能は平安の鍵である。

あなたがた姉妹は鍵を回して天の祝福が家庭にもたらされるよう、鍵をあける手伝いをするのである。あなたが神の神権を敬い、夫が日常生活、家庭、職場、教会で神権の召しを全力を尽して遂行するように励まさない。

多くの面で神権を尊ばない人々のいることは誠に残念である。それは、罪を犯したり、不貞、不正直、教会からの背教という行為にだけ現われるのではない。これ以外の方法でしばしば現われるのである。たとえば、夫や父親が家庭の独裁者であり、「王に悪しきことなし」と思い込み、家庭で横暴な行為をしたり、妻や子供に対して礼を失することほど、男らしくない行為はない。

ある人々は人前で妻や子供をけなし、人間的に妻子を二級品あるいは下等に扱うことによって自分の価値を高めようとしている。

そのような蔑視は恨みや多くの問題をひき起こし、ついには離婚にまで波及するだけである。

清くないものは天の王国に入り得ないのと同様、不親切な人も入ることができない。我々は、幼な児を愛し、すべての女性、たとえ罪人であっても尊敬を表わされたキリストの律法に心から謙遜に従わなくては、その王国に入ることを許されない。

主こそ平和の君である。主の平和には家庭の平和も含まれる。家庭を含め

て互いに親切にするよう教えられたのは主である。主は許し、寛容、忍耐、がまん強さを教えられた。これらは家庭内で行なわれてこそ、最大の意味がある。これら基本的な性質を身につけないで、主のみ前に進むことができるだろうか。

しかしながら、ある家庭ではこれらを破ることが習慣になっている。兄弟達が利己心や視野の狭さからそのような環境を作りあげるということは、彼らのもてる神権を軽んじ、汚していることなのである。

神の律法をひそかに破っても、やはり神の戒めを破ることになる。家庭という四つの壁の中で起こり、公共の場で起こったのではなくとも、それが理由で事の重大さが減るわけではない。

大衆の面前では敬けんな様相を呈していても、家庭内ではその逆の人がいる。このように裏表のある人は神権を軽んじているのである。そして神は偽善者をさげすまれる。

男性は妻子に親切にし、思いやりを示すべきであるだけでなく、自らの模範により、息子に自分を見習わせなくてはならない。

婦人を敬うことは、神権を尊ぶ上でなくてはならない要素である。神権が真に神の御子の神権の聖なる神権であるならば、神の御子の属性は、この神権に属するすべての人々に表われていなければならない。

我々はこの聖句を忘れてはならない。

神権の権能は天の能力と固く結びつ

きて離るべからざるものにして、天の能力は正義の原則によりてのみ支配し運用し得るものなり。この権能のわれらに与えられる事もあらんは真実なり。されどもし己が罪を蔽いかくさんとし、われらの高慢、空しき野望を充たさんと企て、また幾分にてても正しからざることによりて人の子らを支配し、統御し、強制せんとする時は、見よ諸天は退き去り、主の「みたま」悲しむ。主の「みたま」退き去らば、神権またはその人の権威は終りなり。(教義と聖約 121:36~37)

神権に関する責任を家庭内で夫や息子に教える時、この聖句を読むと良い。

しかし、天の力の何たるかがわかり、両親と子供が共に尊ぶならば、天の力はこの世において口に表わし得ぬ喜びと、永遠に続く家族の結合をもたらす。

家庭はある意味で教会の小さな支部に似ている。教会のプログラムがその中にあり、愛と義の中に神権が管理し、家族全員に愛と一致がなければならない。他のどこよりも福音が効果的に教えられねばならない。そしてこの福音を効果的に教えるということは、ゆったりとした雰囲気の中で行なわれるべきである。そのような環境にあつてこそ、子供は愛を学び、福音を喜びとする。しかし、子供は福音を喜びとしなければ、福音に対して従順になれないことを忘れないようにしようではないか。

多くの家族に神権の行使を妨げるよ

うな環境のあることを我々は認めている。ある場合には、父親が教会員でなかったり、夫または父親が亡くなっているなどである。また結婚の機会を見つけれないでいる多くの立派な女性がいる。

しかし、このような家族においても、神権の力を享受できる。

信仰厚い妻や母親は子供達に祈るよう、また福音を信じ、福音に従って生活するよう教えるであろう。

すべての姉妹はワード部全体の父親である監督に教えと導きを求めるであろう。またホーム・ティーチャーの教えと導きをも受けるべきである。ホーム・ティーチャーの影響力は訪問の際だけでなく、ワード部または支部の全会員に絶えず近くあり、援助を得られることを感じる事ができるであろう。

ホーム・ティーチャーは必要な時に祝福を求められる。彼らは助言し、忠告を与える。

教会のあらゆる家族は神の神権の靈感あふる導きを得られるのである。

それゆえ、我々は神権、すなわちこの世で我々に与えられた神の権能がなぜ与えられたかを知らうではないか。

そして、聖霊の力だけでなく、神によりまさしく聖任された僕の現実の姿を通して、神権の目的、すなわち祝福と導きと心身の高揚をもたらし、すべての家庭に神がましますことを確認することを忘れないようにしようではないか。



子供は大人の模範を見て自分の行動を決める

私のとおりにしなさい

モンローおよびシャーリー・パックスマン

オルガニストとしてまた密林地帯の医師として有名なアルバート・シュバイツァー博士はこう言いました。

「模範は大切だとされるが、むしろそれしかないのだ。」

これは両親にもあてはまることなので、ブリガム・ヤング大学において一卒業生が行なった子供の進歩に関する興味深い実験について考えてみましょう。その実験では、耳から聞く模範よりもむしろ目で見える大人の模範に従うという子供の習性が強調されています。実験は保育園の幼児たちを対象に行なわれ、言葉による指導に比べていかに教師の行動が幼児に大きな影響を与えるかを調べるのが目的とされていました。

教師は、子供の前にあるテーブルの上にお菓子の入ったお皿を2枚置きます。子供たちに向かって話をしながら、一方のお皿からお菓子を一つ取って口に入れ、そのあと口からお菓子をそっと取り出してくずかごに捨てます。この動作を終

えたら、楽しそうにはっきりとした口調で、「まあ、このお菓子はおいしいわ」というようなことを言います。

もう一方のお皿からお菓子を取る時はこう言います。「まあ、このお菓子はまずいわ。変な味がするわ。こんなお菓子はイヤね。」しかめっつらをしながら言うこと。それでも続けてそのお皿からお菓子を取って食べるのです。子供はこれらのことをじっと見ています。終りの頃に子供たちに両方のお菓子を食べるように言うと、ほとんど例外なく、子供たちは教師がまずいと言いながらも食べ続けた方のお皿からお菓子を取ります。教師がおいしいと言いながらも食べなかった方のお菓子は取らないのです。

この実験には、世の多くの両親が悟ってきたことが証明されています。それは時として後悔や困惑をもたらしてきたものです。教会の仕事を通して人に奉仕することがいかにすばらしい祝福であるかをいくら説明したとしても、両親が実際



に教会の責任を避けたり、教会で行なわれることに不平を言っているのでは、「最初のお皿」の行動と同じです。教会の役員の前で賞賛の言葉を述べることにより、子供に尊敬と感謝の態度、それと表面的な見方を教えることはできます。しかし、家で同じ役員に対して不平を言っているとしたら、せっかく子供に備わったよいものもくずかごに捨てられるように簡単に失われてしまいます。

働くことすなわち祝福であると教えるにはどうしたらよいのでしょうか。

両親が自分たちの若かりし頃について話す時、いかに一生懸命働いたかを自慢するのでしょうか。こういった自慢は遠まわしに言う不平にほかならないのです。自分たちほど働く必要がなくて幸せだねなどと言ったら、子供は仕事から解放されることが祝福であるとしてしまいます。前の実験で言えば、両親は知らないうちにくずかごに捨てる方の行動をとっていることになります。積極的な仕事の取り組み方には、熱

意と喜びが伴い、態度にも表情にも満足が見られるものです。それではなぜ、両親は教会での奉仕あるいは日々の務めに殉教者のイメージを好んで持ち込むのでしょうか。犠牲をなしているのだと思わせたいのでしょうか。仕事における犠牲は満足よりも大きな祝福でしょうか。両親の態度と模範によって違ってくるのです。

両親が口先きだけだったら、どうなるのでしょうか。

数年前、常識をくつがえすような事件が少年裁判所に持ちこまれました。十代の少女が万引きのかどで告訴されたのです。報告によると、彼女の母も同じような状況のもとで万引きをして告訴されたことがあるという驚くべき事実が判明しました。母親は涙ながらにこう言いました。「私はとても恥しくて。娘が知っていたなどと思いたくありませんわ。でも私ばかりが悪いのじゃないわ。私だってよい母親になろうと努力してきましたもの。私たちは教会に行き、共に家族の祈りをするようにいつも努めてきたんですよ。」

保護観察官は身ぶりをすると、頭をふってこう言いました。「恐らく格言を変えなきゃならないのでしょう。共に祈る家族は共に盗むとでもね。」このような事件が私たちに与えるショックが大きいだけに、両親は原則に対してなした働きと照らし合わせて、自分の生き方の模範を検討されるとよいでしょう。母親の話にあった教会へ行って祈ることは積極的な態度でしたが、恐ろしいことに彼女は自分の行動によって教会で教えている徳を低めていたのです。

子供に対して意識的に悪い思いを植えつけたり、悪い模範を示す親はありません。しかし、弱さのためやうっかりしてしたことが不幸にも大きな影響を与えるのです。性道德に関しても両親から話すのが一番良いのですが、笑ったり不まじめな態度で話せば、子供たちはもう一つのお皿にのっていたお菓子を、すなわち教師が口で否定しながらも実際には楽しんでた方を取るのと同じ反応を示すことでしょう。

多くの親は、「どうしてうちの子はもっと本を読まないのでしょうか。」とよくこぼします。親の方でももっと楽しく本を読んでいるところを見せた方がよいと思います。親が熱心に読書の楽しさ、満足感を語りかけるとき、その言動が一致していれば、子供にむりやり読書をさせるより効果があります。喜んで教会の仕事をなし、よい音楽や文学、絵画、演劇聖典に親しみ、創造的な趣味を持つこと、すなわち福音にそった生活をする両親は、子供に与える最大の影響力つまり模範の力を持っているのです。

新しい息吹を秘めた

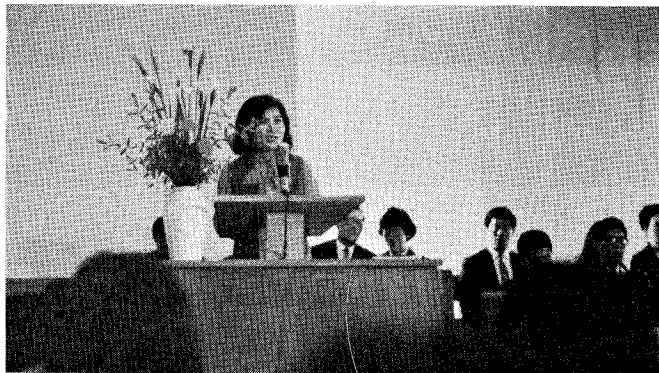
日本伝道部大会



親しく話されるビルス伝道部長

五月雨が、静かに降る武蔵野の地で、大会が開かれました。ステーキ部が独立した後、初めて開かれた大会でしたが、宣教師を含めて400名以上の人々が各地から参加されました。前夜は、各支部、伝道地の若い兄弟姉妹達が用意して下さった歌、劇、ダンスなどを楽しく見ることができました。混乱した世界の若者達の中であって、モルモンの若者達は何と素晴らしいのでしょうか。ビルス伝道部長は大会の席上、特にアモス書8章11節から13節まで引用してお話下さいました。(もう一度お読み下さい。)

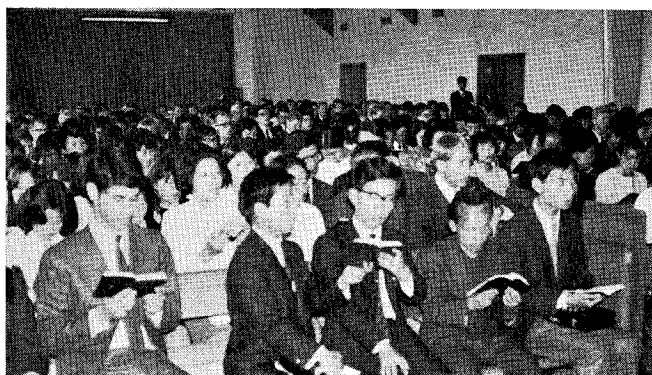
今回の大会のテーマは「更にわれは汝に告げる。あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民およびあらゆる人々がひろく救い主のことを知る時がくる。」(モーサヤ書3章20節)であり、伝道を終える宣教師達から、また、伝道部補助組織の指導者達から力強い証に燃えた話を聞くことができました。私達は、今回の大会を通じて、心からビルス伝道部長を支持し、増々日本伝道部を発展させる決意を新たにしました。都合で来られなかった各地の兄弟姉妹、この次の大会では必ずお会いしましょう。神様の豊かな祝福があなた方一人一人の上にありますようお祈り致しております。



宣教師を終えられた奥田姉妹の力強い証



高らかに歌うシンギング・マザーズ



会場いっぱいの聖徒達



静岡支部 チャッキリ節



群馬支部のダンス

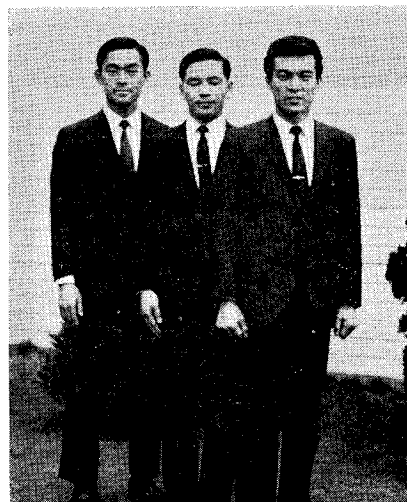
近畿中国 地方部新設さる

主の御業の発展にともない、近畿地方部が新たに近畿中国、近畿四国地方部に分割され、新たに二つの地方部長会が組織された



＊近畿四国地方部長会

地 方 部 長 安 芸 宏
第一副地方部長 牧瀬十二郎
第二副地方部長 福屋 航二

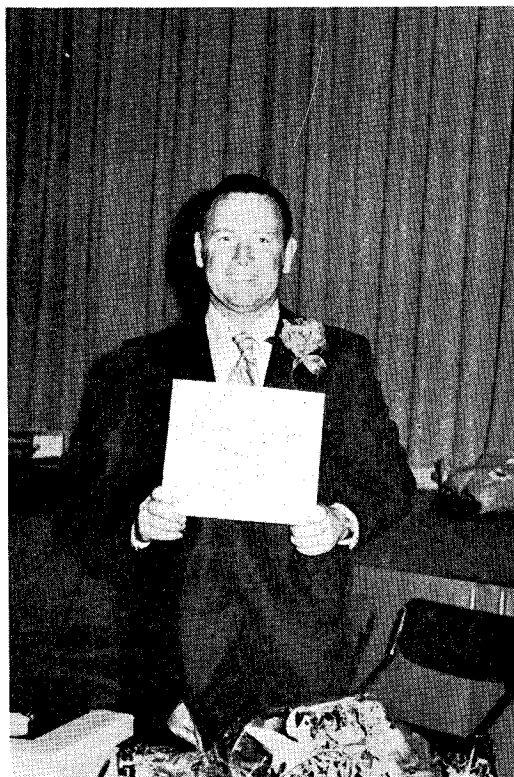


＊近畿中国地方部長会

地 方 部 長 中 野 正之
第一副地方部長 浜田 博之
第二副地方部長 矢野 義高

＊ 5月3日の近畿地方部大会で上記の地方部長会が支持され、主の御業の大きな発展が期待されます。

尚各地方部に所属する支部は以下の如くです。近畿中国地方部；阿倍野，東大阪，堺，神戸，姫路，岡山の6支部。
近畿四国地方部；京都，岡町，尼崎，西宮，高槻，高松，松山，高知の8支部と決りました。



プロゴルファー

＊ ビリー・キャスパー来る

全米プロゴルフ・トーナメントのチャンピオンである有名なビリー・キャスパー兄弟が万国博を訪問され、その後阿倍野支部に立ち寄られて、私達は証詞あるお話を聞く機会に恵まれました。

＜5月3日＞

＊ 万博モルモン館ニュース

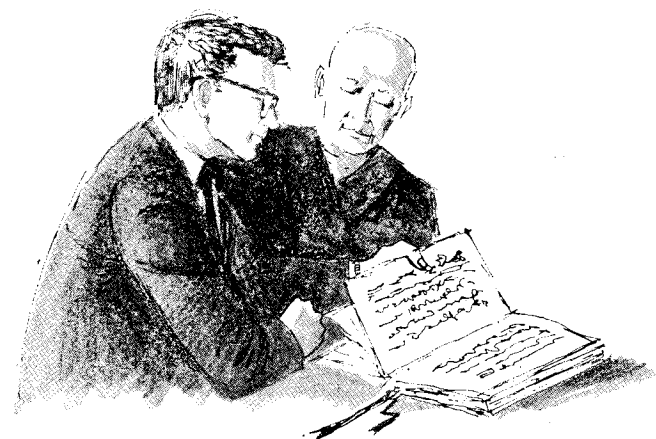
万国博が開催されて早や2ヶ月を過ぎさった5月15日現在でモルモン・パビリオンを訪れた人々の数が延べ人数にして1,615,000人と発表され、5月3日は1日で55,000人の入館があった。ちなみに最大の規模を誇る日本館は延べ 3,318,866、松下館は延べ2,227,022と発表されている。この数字を見ると小さなモルモン・パビリオンに非常に沢山の人が入館されたことがわかる。

日本西部伝道部だより



3月18日は西日本、沖縄の聖徒たちにとって、まさに満たされた日、約束の日、感激の日でした。現在までの進歩と未来の無限の可能性に対する思いで各人の胸はふくれました。

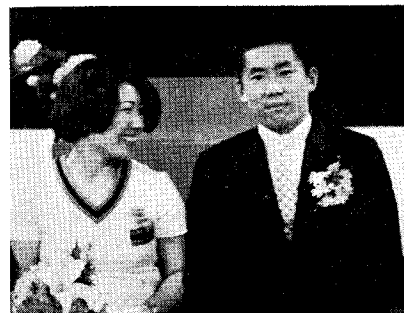
日本西部伝道部が十二使徒評議員エズラ・タフト・ベンソン長老により開かれたのです。集まった聖徒たちの中に、主のみたまが一杯に満ちていました。新しい日本中央伝道部の岡崎部長御夫妻の祝辞に続いて、渡辺御夫妻の心を動かす話がありました。最後にベンソン長老が、主の時に關して力強い、靈感あふれる話をされ、今こそアジアの時がきたと述べられました。新伝道部長に任命された渡辺驪兄弟が、全出席者により心から支持され、新しい成長と繁栄の世紀が始まったのです。



ソルト・レーク系図協会のジョン・オルトン兄弟は、私たちの宗教に欠くことのできない系図に関して、会員たちの質問に答えてくれました。オルトン兄弟はアジアの多くの国々を旅行し、系図資料を探求し、会員たちに系図の重要性を知らせ、その方法を理解させてくれると同時に、おおいに親善をはかられました。日本西部伝道部内で、彼は仏教のお坊さんから、起原を詳しく調べている学者に至るまで、系図に關係ある大勢の人々に会いました。彼の訪問は系図のさらに確かな知識を熱心に求める聖徒にとって、まことに価値ある、ありがたいことでした。またそれは必ずやこの進歩の時代における系図探求に伴う将来の協力を促す出来事となるでしょう。

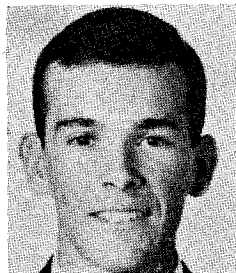
4月16日の夜、オルトン兄弟との系図集会を終って、みながおやすみなさいを言って家に帰ろうとしていた時、とても素晴らしいことが起こりました。みなは少しの間結婚式のために残るように招かれたのです。礼拝堂に椅子が整えられ、花が美しく飾られていました。着飾った服装の人々はほとんどみられませんでした。しかし、神の二人の子供たちが入場し、渡辺伝道部長の司式の際には、愛のみたまが一面にみなぎっていました。

進藤博治兄弟、佐藤元子姉妹の行なった福岡の「びっくり結婚式」に永遠のしあわせあれと心からお祈りいたします。



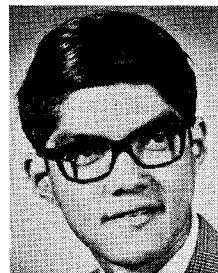
4月29日（日）の午後、教会の近所の方と訪問者の方々約300人が、映画「幸福を探し求めて」を観覧され、教会を紹介されました。映画を上映し、会員と宣教師の愛と一致の精神を示すことにより、人々をモルモンに導くことができるのです。

万博から毎日何千枚という紹介カードが送られて、宣教師と会員たちは非常に忙しい日々をすごしています。会員たちは教会の集会や活動の後で、新しく紹介で来られた人々のために、宣教師を助けています。宣教師と共に訪問をしたり、家庭集会に出て、多くの会員たちは祝福されているのです。



美しい宮崎市でも、よきおとずれを聞かれる日がやってきました。ブレイン・ジョンソン、ロバート・ホキ両長老が日本西部伝道部になって初めて新しい支部を開こうとしています。

主の靈感と会員の皆さんの愛と協力のおかげで、長老たちはほんとうに進歩し、全伝道部が福音を伝える備えをしています。主の時間表の中で、数々の新しい支部が、やがて開かれようとしています。日本西部伝道部の一人一人からみなさんに心からのごあいさつを申し上げます。



東京ステーキ部からのお知らせ

東京ステーキ部長 田 中 健 治

私は全会員の支持のもとに下記のプログラムを推し進めることになりました。5月16日、17日の第1回ステーキ部大会で提示されましたことがらを私達の決心と共に御披露したいと思います。火の玉のようになって伝道とホームティーチングをいたします。これは神様の王国を私達の地域に急速に完全に築き上げるために最も大切なプログラムだからです。

5名の七十人会のユニットの方々を含めてこの10日間に42人のステーキ部宣教師の方々が面接を受けて召されました。この方々とワード部の伝道アドバイザー、委員の方々、会員の方々によって東京ステーキ部の生みの親であるビルス日本伝道部長と密接な連絡を保ってプログラムが行なわれます。万国博の会場より多くのカードが毎日送られて来ておりますことを感謝しております。このカードがすぐに葉書となり、専任宣教師の方々は求道者の方々と家庭集会に集中して頂きバプテスマをお受けになったあとのレッスンはステーキ部宣教師が親しくお教えし3週間後には必ずホームティーチャーが割当てられ、4回目以降のバプテスマ後のレッスンを引受けます。レッスンの最後に近くなりますと、ホームティーチャーの方は新しい会員の方々と系図の仕事にとりかかります。これらのプログラムは神権コリレーションプログラムとして遂行されるわけです。『お互の心が内に燃えたではないか』(ルカ24:32)は大会のテーマでした。私達は兄弟姉妹同胞の方々のために一心に働きたいのです。ペテロがキリストから三度繰返して依頼された言葉が今私達一人一人の心をとらえています。『我が羊を養え』と。キリストが残して下さいました新しい誠命の、『兄弟姉妹互に相愛する』ことは御霊の支持を天から受けて私達の心を内から燃やし、外からはまことに神の実在を証明する光景として人々に訴えるのです。

私達はアジア最初のステーキ部の一員として神の子供としての任に耐えることを世界中の方々に示せるように、与えられたつとめを忠誠を尽して果たす覚悟です。皆様が常に清い幸福な生活を送られますよう、全ての良い挑戦をお果たしになれますようお祈りいたします。

☆5月9日には楽しいフォークダンスフェスティバルを開きました。写真を御覧下さい。

☆嬉しい出来事のもう一つは5人の姉妹の方々がゴールデンングリーナー賞をお受けになりました。重松紀世子(T3)、岸野みさを(T3)、岡安立江(T2)、井上礼子(T3)、石坂春美(Y)の方々です。おめでとうございます。

☆多くのモルモン家庭が誕生しております。今年のソルトレーク神殿へは当ステーキ部からも現在248名の方が申込んで準備中です。系図は期限月を迎えて大忙しです。

☆ステーキ部のスケジュールは次表の通りです。

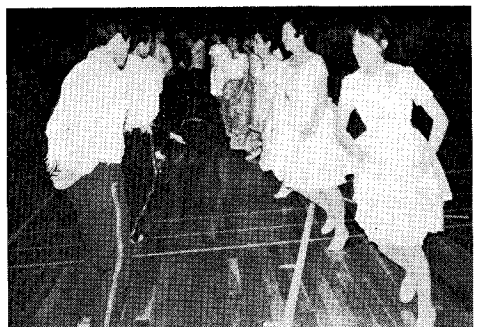
ステーキ部スケジュール				東京ステーキ部			
	日 曜 日	月 曜 日	火 曜 日	水 曜 日	木 曜 日	金 曜 日	土 曜 日
第 一	神権会ビジネスデー	家 庭 の 夕 べ	PM 7:00~8:00 ステーキ部各神権委員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部部長会	ホ ー ム テ ィ ー チ ン グ	M	PM 7:00~9:00 ステーキ部各組織会長、役員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部神権役員会	
第 二	高等評議員ワード部訪問 ステーキ部指導者ワード部訪問		PM 7:00~8:00 ステーキ部各神権委員会 PM 8:00~9:00 大祭司定員会長会 PM 9:00~10:00 ステーキ部部長会		I	PM 7:00~9:00 ステーキ部各組織会長、役員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部神権役員会	
第 三	高等評議員ワード部訪問 PM 3:30~4:30ステーキ部神権集会 PM 4:40~5:40ステーキ部監督会集會 PM 5:50~6:50大祭司定員会 PM 7:00~8:00ステーキ部監督集会 PM 8:00~ H、T日頭評価		PM 7:00~8:00 ステーキ部各神権委員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部部長会		A	PM 7:00~8:00 ステーキ部評議会 PM 8:00~9:00 ステーキ部各組織会長、役員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部神権役員会	
第 四	高等評議員ワード部訪問 PM 3:00~5:30 ステーキ部指導者会		PM 7:00~8:00 ステーキ部各神権委員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部部長会			PM 7:00~9:00 ステーキ部各組織会長、役員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部神権役員会	
第 五			PM 7:00~8:00 ステーキ部各神権委員会 PM 8:00~10:00 ステーキ部部長会			PM 7:00~9:00 ステーキ部指導者集会	



課題曲 コリードを踊る東京ワード部



自由曲 エブリー・ウェア・ユー・ゴーを踊る東京ワード部



自由曲 白い小馬を踊る東京第二ワード部



審査発表を聞く出場者

フォークダンス

フェスティバル

日本における教会の発展

この地上における主の教会は急速に発展している。しかし、日本におけるほど非常にすさまじい進歩を遂げている地域は、おそらく他にないのではあるまいか。このことは以前の日本伝道部と日本・沖縄伝道部の二つから最近四つの伝道部、すなわち日本西、日本中央、日本、日本東の各伝道部と新しい東京ステーク部へと分割されたことにより証明される。

ハワイ出身のエドワード・岡崎部長が、これまで管理していた前日本沖縄伝道部の一部である新しい日本中央伝道部を引き続き指導する。現在、彼は奥さんと二人のお子さんと共に一年半以上日本に滞在している。

前日本沖縄伝道部の残り半分は、日本西部伝道部となり、渡辺驩兄弟が初代伝道部長に召された。石川県小松市出身の渡辺伝道部長は会員歴二十年、数多くの指導者の地位にあった。彼は過去七年間、北部極東伝道部、日本伝道部の副伝道

部長として働いた。伝道部長に召される前は教会翻訳事業部のアジア地区マネージャーであった。新潟出身の奥さん、白井八重子姉妹は1950年以来教会の会員であり、プライマリー、扶助協会において活発に働いてきた。

日本伝道部はウォルター R. ビルス伝道部長の管理の下におかれている。ビルス部長とエルシー・トーガーソン・ビルス姉妹は、共にユタ生れで、結婚前、ハワイの日本伝道部で伝道を終えた。彼らの三人の息子さんも日本で伝道を終えている。

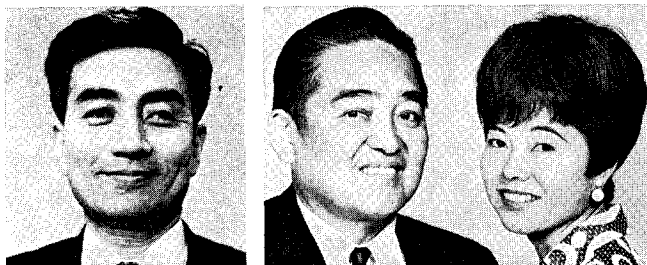
前日本伝道部の残りの部分は日本東伝道部と呼ばれ、初代伝道部長としてラッセル N. 堀内兄弟が召された。堀内伝道部長はハワイ出身で、ブリガム・ヤング大学で地理の助教授を務めていた。彼は会員歴二十五年、BYU第14ワード部の副監督をしていた。奥さんは、東京出身のアネット、愛子森姉妹で、堀内部長が第二次大戦後マッカーサー元師のスタッフとして米軍で働いている間に姉妹と知りあった。堀内部長と姉妹の間に、現在教職についている21才の娘さんがいる。

新しい東京ステーク部の部長は、暖房機器会社の部長を務める43才の田中健治兄弟である。田中兄弟は広島生まれで、前橋出身の永井清江姉妹と結ばれ、現在三人の子供さんに恵まれている。第一副ステーク部長は菊地良彦兄弟、第二副ステーク部長は相良健一兄弟である。東京ステーク部は、東京（中央）、第二（北）、第三（西）、第四（南）、第五（東）、横浜の6ワード部からなり、会員数約4,000名である。

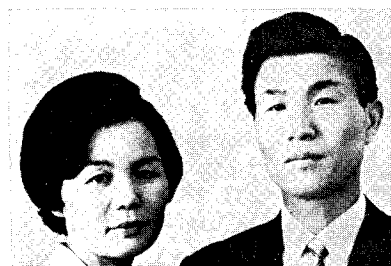
新しい教会組織が次々とつくられたことは、日本の教会の目覚ましい発展を示している。もう一つのしるしは絶えず増加していくバプテスマの数である。日本の伝道の最初の23年間にわずか166名がバプテスマを受けたが、これは今日では時に一カ月で達成する数字である。

日本の教会における素晴らしい発展は日本人会員12,500名の勤勉な働きと強く、賢明な日本人の指導者、福音を日の出ずる国にもたらした数多くの宣教師のお蔭である。

多くの人々にイエス・キリストの福音の真理を理解させ、これを受け入れる助けを与えられた会員、指導者、宣教師に感謝する次第である。



左上 田中健治東京ステーク部長



右上 岡崎日本中央伝道部長御夫妻

中央 渡辺日本西部伝道部長御夫妻

左下 ビルス日本伝道部長御夫妻

右下 堀内日本東伝道部長御夫妻



平凡のなかの一編の詩^{うた}

リチャード L. エバンス

かの著名なウィリアム・オスラー氏（カナダの医師、1849—1919）は、日常生活の何気ない事物に心をむけることについて語った。彼はそれを「平凡の詩」と読んだ。「月並な毎日の生活のなかで、……愛し、喜んで悲しみ、憂える人間、どこにでもいる労働に疲れてやつれはてたひとりの女の姿に、人生のまことの詩、平凡の詩をよむことのできる力こそ、あなたを支える最も強い力である」。我々は非凡なもの、めだつもの、人工のものに心ひかれることが多い。しかしこの世界は、問題に悩み、重荷を背負い、子供や病人をかかえ、互いにいたわりあい、自分の仕事に精を出しながら、失敗にめげず、けんめいに前を向いて歩こうとする平凡で誠実な人々の絶ゆまぬ努力によって動いている。日々に己れのなすべきことを遂行するこのすばらしい人々なしでは、世界は多くを失っていたことであろう。機械は、ものを考え、良心に従う誠実な人々の代りとはならぬ。レジャーは、今なすべき堅実な仕事の代りとはならぬ。フィリップス・ブルックスは言った、「もしあなたが自分の仕事を誠実に果たしているならば、あなたは全世界に対して、最もすばらしい働き手と同じようなまことの貢献をしているのだ。……さあ、行きたまえ、あなたの仕事に励みたまえ……元氣よく愛をもって。ここから仕事を愛し、……他の人々のなした仕事を深く感謝しつつ。……すべてのことが最良でなくてはならぬ。すべての人は自分の場所で最善を尽さねばならぬ。……」¹ なさねばならぬことを知り、そののちそれをなすことは、大切であるばかりか時には英雄的な行為でもある。困難や失敗にもかかわらず、日々のつとめを正直に立派に果たしているすばらしい男女、子供たちを、私は神に感謝したてまつる。誠実な人々、ごく平凡な事柄、毎日の働き、彼らの立派な仕事——「平凡の詩」を、心より感謝したてまつる。

1. フィリップス・ブルックス、「世の光、およびその他の説教：同一と多様」

聖徒の道

1970年6月20日発行

振替口座 東京16226番

発行人兼編集人 ウォルターR. ビルス

発行所 東京都港区南麻布5-8-10

末日聖徒イエス・キリスト教会 電話(442)7438

印刷所 太陽印刷工業株式会社

定価 100円

予約 一年間 1,000円（外国4ドル50セント）

電報受信略号 「トウキョウ」 マツジツ